表紙, 目次, 抄録, 雑錄, 漫錄, 雜報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38385

明治四十四年七月二十日發行

十全會雜誌

第六十六號

金澤醫學專門學校十全會

十全會雜誌第六十六號目次

○原著及實驗

●「クレオソート」ノ瓦斯代謝ニ及ボス影響。　ドクトル　竹中繁次郎氏
●乳兒期ニ於ケル所謂脾疳ニ就テ。　岡本京太郎氏

○抄　錄

●組織染色後中ニ含マレタル酒精ノ意義。
●脚氣ニ於ケル心臟肥大ト血液粘調度トノ關係。
●簡單ナル血液凝固時間測定ノ一新法。
●肺尖ノ結核菌ニ侵サレ易キ理由。
●手ノ消毒檢査。

○雜　錄

●六〇六號使用法ノ優劣。
●「サルヴルサン」使用上二三の注意。

○漫　錄

●醫歌。●杏林笑話。●島田吉三郎君。

○內地雜報

●聖恩枯骨に及ぶ。●學位授與。●新博士略歷。●女醫現在數。●京大ノ夏期講演會。●日本醫學會の授賞規程。●北陸製乳株式會社。●藥學四三會。

○外國雜報

●獨乙國軍醫の階級と其給料。

○醫校雜報

●海軍の二條例改正。●清國留學生數。●官立醫專ト清韓人。●南滿醫學堂。

○學　會

●日本小兒科學會金澤地方會。●金澤醫學會。●北越醫學會春季總會。●本會員ノ學會演說要領。

○校內雜報

●四十二年度卒業生同期會記。

○人　事

●高山教授母堂逝去。●福岡喜洋氏母堂逝去。●山碕教授歸朝。●上田教授叙勳。●蓮村外男氏。●佐野里吉氏。●久保武氏。●ドクトル日野信次氏。●天野長重氏。●白井渉氏。●淵原隆庵氏。●鷹津冬藏氏。●塚本政治氏。●關承五氏。●北川文松氏。●馬詰定衛氏。●馬場庄江氏。●竹村茂三氏。●松生哲良氏。●板谷外五助氏。●齊藤友一氏。

○會　告

●校外特別會員會費領收報告。

私ノ只今乳兒脾疳トシテ述ベマシタ病例ハ、所謂長兒ノ脾疳ヨリハ寧ロ此「ライス子ールシヤデン」ト申スモノニ酷似シテ居ルノデ、其他經過及豫後ノ關係モ殆ント同一デアリマスカラ之ヲ又「ライス子ールシヤデン」ト診斷セ子ハナラヌコトニナリマス、扨テ一方ニハ乳兒脾疳ト診斷シナガラ一方ニハ「ライス子ールシヤデン」デアルト云フノハ甚タ曖昧不可思議ノ樣ニ聞ヘマズガ、私ハ是ヲ大變興味ノアルコト、考ヘルノデアリマス、御存知ノ如ク彼ノ脾疳ヤ「ライス子ールシヤデン」ハ何レモ其本態ガ未タ明デナイノデアリマシテ、此両者ハ果シテ異種症ノモノデアルカ或ハ同種病ノモノデハアラヌカ更ニ分ラヌノデアリマス、故ニ私カ今乳兒脾疳ト題シマシタ病例ノ如キ、何方ヘデモ編入シ得ル所ノ中間物ヲ研究スルノガ両者ノ異同及本態ヲ推測スルニ必要デアロート考ヘマス、丁度彼ノ「ラヒチス」ト「オステオマラチ―」ノ異同ヲ研究スルニ所謂侈行型ナルモノガ重要ナ參考トナルノト同樣デアリマス、夫デ私ガ今所謂乳兒脾疳ト名ケマシタモノハ、一方脾疳ニ相違ナク又一方「ライス子ールシヤデン」ニモ相違ナイトスレハ、「ライスネールシヤデン」ト脾疳トハ同一病種デアツテ又甲ヲ乳兒ノ脾疳乙ヲ長兒ノ「ライス子ールシヤデン」トモ名ケ得ルモノデアロー、只種々ノ要約ヲ異ニスルガ爲メニ症狀經過ノ差異ヲ來スノデハアルマイカト斯タ考ヘルコトガ出來マス、例令ハ脾疳ナルモノハ「ライス子ールシヤデン」ノ上ニ一種ノ醱酵菌ナドノ作用ガ加ハリテ或ル毒物ヲ生成シ其毒物ガ病機ニ參加シタモノトモ想像シ得ルデアロー―シ、或ハ又脾疳ハ「ライスネールシヤデン」ガ年齡ノ差異、輕重ノ度合ニヨリテ變形シタモノデアルトモ説明シ得ラレヌコトハナイ、勿論之ヲ確ニ解決スルニハ將來多クノ研究ヲ要シマスガ、今日ノ處ニテハ私ハ乳兒ノ脾疳モ長兒ノ脾疳モ同ク「ライス子ールシヤデン」ノ基礎ノ上ニ立ツモノテ、特ニ本病ノ夏季ニ多キハ之ニ醱酵菌ナトノ作用カ參加スルモノデハアルマイカト想像シテ居ルノテアリマス。

孤録

●組織染色液中ニ含マレタル酒精ノ意義ニ就テ

（中外醫事新報第七二〇號）

波多腰正雄

著者ハ普通染色液中ニ存スル「アルコホール」ガ實際上如何ノ意義ヲ有スルヤヲ檢センガタメ種々ノ試驗ヲ企テタルガ其概要左ノ如シ

(一)「ヘマトキシリン」(或ハ「ヘマテン」)ヲ使用スルトキハ、水溶液ヨリモコレニ一定ノ酒精ヲ加味スベシ、コレニヨリテ過染ヲ防禦シ得ルト同時ニ、「ツエロイドイン」ノ染色ヲ殆ンド全ク防止スルコトヲ得ベシ

(二)同上ノ作用ハ例ヘバデラフイルド氏及ビハンゼン氏「ヘマトキシリン」液ヲ單ニ水ヲ以テ稀釋スト雖モコレヲ期待スベカラズ、コノ場合ト雖モ「ツエロイドイン」ハ明白ニ染色セラレ、從テ全染色結果鮮明ノ度ヲ缺ク

(三)加味スベキ酒精ノ適當量ハ四〇乃至五〇%ノ間ニ在リ、六〇%以上ノモノハ結果ノ見ルベキ無シ

(四)某ノ色素ガ水溶液トナリ得ルニモ拘ラズ、コレニ一定量ノ酒精ヲ加味スルカ、或ハ強キ酒精溶液トシテ使用セラルヽコトハ、コレニ由リ染色作用ヲ一定ノ組織或ハ構成分ニ限局セシムルカ、(即チ孤立染色)或ハ染色作用ノ漸進的秩序的ニシテ、過染ヲ防止スルカノ點ニ於テソノ一意義ヲ求ムベシ

(五)「ヘマトキシリン」水溶液中ニ過染セル切片ヲ更ニ酒精(乃至鹽酸酒精)中ニ投入シテ染色ノ鮮明(Differenzierung)ヲ營爲セシムルヨリハ、寧ロ最初ヨリ酒精溶液ヲ使用スルノ簡單ニシテ合理的ナルニ如カズ

●脚氣ニ於ケル心臟肥大ト血液粘稠度トノ關係

醫學博士　楠本長三郎
高醫學士　假家昇一

(大阪醫學會雜誌第九卷第四號)

血液循環ノ重要ナル Faktor ハ心臟力、摩擦抵抗、血管壁ノ緊張力互ノ關係ニヨルモノニシテ、脚氣患者ノ心臟肥大擴張ノ發現ハ事實ナリトセバ、必ズヤ血液循環ノ重要ナル Faktor ノ變調ニ基因セザル乎、之ニ就テハ其一部タル脚氣患者ノ血液ノ理化學的關係ヲ知ラント欲シ該患者ノ血液粘稠度ノ測定ヲ企テタル所以ナリ測定シタル例ハ僅ニ十八例ヲ算スルニ過ギズト雖モ、其大部分ハ血液粘稠度ノ上昇ヲ來タセルヲ見ルコノ粘稠度ノ結果ハ脚氣心臟働作ヲ大ナラシムル者ナル可シ然ラバ脚氣ニ於ケル心臟肥大ノ原因ハ種々アルベシト雖モ該患者血液粘稠度ノ上昇ハ機械的原因ニ關與スル者ナルベシ

然ルニ脚氣患者ニ於テハ左室ニ比シ右室ノ著シキ肥大ヲ呈ス此點ニ付テハ目下研究中ニ屬ス、後日詳報スベシ、而シテ脚氣患者血液粘稠度ノ上昇ハ如何ナル理由ニ基クカハ予等未ダ報告スルノ域ニ達セス

恰モ善シ昨夏長與氏ハ脚氣副腎ニ就テ、鳥蘭氏ハ脚氣患者血液中ニ「アドレナリン」類似物質存在ニ就テ報告セルヲ見テ、健康ナル「カニンヘン」ノ靜脈內ニ「アドレナリン」ヲ注射シ注射前及注射後ノ血液粘稠度ヲ測定セリ、之ニヨル時ハ注射後二時間ニ於テハ血液粘稠ハ最高ニ上昇シ、其後漸次減弱、四時間ニ於テ殆ンド普通ニ減退セルヲ見タリ詳細ハ後日報告スベシ

以上事實ニ徵シ脚氣患者ノ血液粘稠度ノ上昇ハ心臟働作ヲ大ナラシメ、以テ心室ノ肥大擴張ヲ起ス機械的原因ノ一部ニ關與スルモノナルベシ

●簡便ナル血液凝固時間測定ノ一新法

醫學博士　菊池米太郎

(臨牀集報第四號)

血液凝固現象ノ遲速ト疾病若クハ身體健康狀態トノ間ニハ何等カノ關係アルベキヲ推測セル著者ハ、古來之ガ時間測定法トシテ試ミラレタル方法ヲ文獻ニ徵シ、又此方法ニ缺ク可カラザル條件ヲ叙述シ、

シテ著者ハ左ノ如キ單簡ナル一方法ヲ案出シタルコトヲ記述シタリ

採血ノ部位ハ之ヲ中指ノ末節爪牀ノ附近トシ組又ハ護謨管(著者ハ聽診器ノ護謨管ヲ利用セリ)ヲ以テ該指ノ第一及ヒ第二節ヲ緊縛シテ末節ニ充血セシメ「アルコホール」ニ浸シタル綿球ニテ局部ヲ清拭シ、プラハツツ氏注射器ノ針尖ニテ輕ク穿刺シ、迸出スル血液ヲ硝子毛細管ニ吸引シ之ヲ溫カニ溫湯ヲ充テタル金盥又ハ木桶ニ投入ス、硝子管ハ豫メ約一仙迷毎ニ鑢ヲ加ヘテ破折シ易カラシメ、金盥又ハ木桶內溫湯ハ三十七度ナラシム、病院若クハ研究所ナレバ孵卵器ヲ利用シ得可キヲ以テ更ニ可ナリ

斯クテ時間ヲ期シテ溫湯內ニテ試ニ硝子管ヲ折斷ス若シ血液ニシテ凝固セザル間ハ折斷端ハ明カニ兩斷セラレ其間何等目ニ觸ルヽ者ナシト雖少シニテモ凝固現象ノ現出セルトキハ兩折斷端ノ間ニ先ヅ極メテ細キ纖維ノ繫着シ之ニ附着セル血液ハ漸次溫湯中ニ離散シ去ルベク凝固現象ニシテ更ニ完全ニ形成セラルヽトキハ硝子管內ノ血液ハ一ノ血棒トナリ硝子管ハ折斷ス

ルモ血棒ハ依然トシテ存ス可シ、著者ハ最初血液ヲ碗子管ニ吸入セシ瞬間ヨリ此棒ノ全ク完成スルニ至ルノ時間ヲ測定シ之ヲ以テ凝固現象ノ表徵トナセリ

●肺尖ノ結核菌ニ侵サレ易キ理由

（W. A. Freund 氏說ヲ紹介ス）

（臨牀集報第三號）

醫學博士　菊池米太郎

氏ハ揭記ノ問題ニ關シテ先ヅピルヒ、ヒルシュフエルド、ハーチウ、オルト、ウエレミンスキー諸家ノ從來提唱セル所ヲ列擧シ、是等ハ能ク眞理ノ一面ヲ捕捉シ得タル者ニ似タリト雖モ剔抉未ダ其核子ニ及バサルノ憾アリトナシ、フロインド氏ニヨリテ主張セラレタル所ノ第一肋骨ノ發育不全、同肋軟骨ノ早期化骨、之ニ隨伴セル肺尖部ノ呼吸障害ハ人類トシテ共通的ニ此部ニ有スル弱點ニ一層ノ度ヲ加ヘテ以テ結核菌ノ繁殖ニ便ヲ與フル者ナリトノ解說ハ刻下其最モ肯綮ニ中レル者ナリト做シ、猶ホシュモールフオン、ハンビマン、ハルト氏等ノ所說ヲ參酌綜合シテ終ニ如上ノ解釋ヲ下ノ三項ニ歸納シタリ

第一、直立歩行スル人間タルガ爲メニ、肺臟ノ上部ハ發育不完全ニシテ、隨テ其部ニ於ケル血液淋巴液ノ循環不充分ナルコト

第二、肺臟ノ機造上肺尖ニ向テ分枝セル氣管枝ハ他ノ中下葉ニ向フ其者ニ比シテ甚ダシク鋭角ヲナシテ上行スルガ故ニ、肺尖部ニ於テハ塵埃及ビ細菌ノ停滯沈着シ易キコト

第三、先天性若クハ後天性ニ第一肋骨及ビ同肋軟骨ハ甚シク壓迫ヲ受ケ、其部ニ於ケル生活機能障碍セラレ以テ細菌ノ繁殖ヲ輔クルコト

肺尖ノ結核菌ノ侵サレ易キ所以ノ者實ニ上揭ノ三ケ條ニ在ル者ノ如ク、就中第一第二ハ共ニ人類トシテ免カル能ハザル弱點也、加フルニ先天性血液、細胞等ニ抗結核菌性弱點ノ之レニ伴フアリトスルモ、尙ホ肺尖「カタール」ニ關スル臨牀的事實ノ全般ヲ蔽フコトヲ得ズ、第三即フロインド氏說ヲ俟テ始メテ其缺陷ノ大部分ヲ補塡シ得タルヲ覺ユ、而シテ氏等ハ胸廓ノ完全ナル發育ヲ以テ肺結核豫防策ノ重要條件トシテ、兒童教育上其體操及ビ姿勢ニ就テ父兄幷ニ教育者ノ注意ヲ促ガシ、且ツ臨牀醫家ニ向テハ肺尖「カタール」ノ初期ニ於テ外科手術的ニ胸骨第一肋骨間ノ結合ヲ緩解スベキヿ」ヲ慫慂シ、カウシュ、ザイデル氏等ハ既ニ此法ヲ試ミテ好成績ヲ得タリト唱ヘタリ

（以上二項J、U、抄）

●手ノ消毒檢査

（好生館醫事研究會雜誌第一八卷第二號）

ドクトル　岡田鶴也

演者ハギーセン大學コツセル教授ノ下ニ作業シタル手ノ消毒檢査ニツキテ演述シタリ

演者ハ先ヅ手ノ消毒ノ困難ナルコトヲ述ベ、又一定精確ナル檢査方法ノ發見スル能ハザルハ其一大原因タルヲ述ベ、在來行ハレタル檢査方法中パウルザルウエ氏ノ提出セル新方法ハ最モ精細確然タルモノニシテ、吾人ハ此法ヲトリテ以テ模範トナスベク、演者ハコノ方法ヲ模範トナシ自ラ施行セル方法ヲ詳述シ在來普通使用セラルル諸種消毒藥竝ニ數種ノ新藥ニシテ未ダ確實ナル檢査方法ノ行ハレザルモノ及ビ近時ラウベンハイメル氏ガ「フエノール」ノ各誘導體ニ就テ其殺菌力ヲ檢査シ多數消毒藥中遙カニ優越セル效果ヲ顯ハシタル、「クロールメタクレゾール」ノ「リチノール」酸「カリウム」ニ溶解セルモノ、溶液ヲ以テ手ノ消毒檢査ヲ行ヒ、コノ「クロールメタクレゾール」ハ最困難ナル手ノ消毒ニ向テ遙カニ卓越ナル救方ヲ有ス

ルノ成績ヲ得タルコトヲ述ベ、演者ハ尙ホ進ンデ此有力ナル「クロールメタクレゾール」ヲ以テ手ノ消毒ニ向テ種々精細ナル檢査ヲ反復シ、頗ル優良ナル成績ヲ得タリ

「リチノール」酸加里ニ溶液サレタル「クロールベタクレゾール」ハ「アルコホール」ニ全ク透明ニ溶解シ、コノ「アルコホール」性溶液ハ臭氣ヲ發セズ又泡沫ヲ發セズ且ツ無毒ニシテ手ヲ刺戟スルコトナク最モ適當ナル溶液ナリトス

七〇%ノ稠度ヲ有スル「アルコホール」ニ、〇・五%「クロールベタクレゾール」ヲ溶解シタルモノハ其結果最佳良ナリ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

雜錄

●六〇六號使用法の優劣（續）

（四月六日傳染病研究所同窓會ニ於テ）

秦　佐八郎

靜脈內注射ニ於テハ數日ニシテ前回ノ藥品ハ殆ント全ク排泄セラル、故注射ヲ反覆スルニ當リ安心シテ第二回ヲ注射スルヲ得、以上述ベタル處ヲ要スルニ全體ノ上ヨリ靜脈內注射尤モ理想的ナリ、此事ハ昨年四月已ニ余ガウヰ―スバーデンニ於ケル演說中ニ明言シ置キタル所ナリ、然レトモ其以來依然トシテ尤モ簡單ニシテ疼痛少ナキ中性エムルジョンノ皮下又ハ筋內內注射ガ主トシテ行ハレタリシニ近時其漸ク非ナルヲ知リ歐洲ニテハ靜脈內注射ニ歸シツ、アリ

消毒法ノ嚴守ハ何レノ方法ニ於テモ必要ナレ𪜈靜脈內注射ノトキハ特ニ嚴確ナルヲ要ス、從テ充分ノ設備ヲ要ス

靜脈內注射方法。血中ニ酸性液ヲ注射スルハ有害ナリ必ズ「アルカリ」性透明液ヲ用ヰザル可カラズ場所ハ肘及前腕ニ於テ最モヨク浮上リタル靜脈ヲ選ビテ用ユベシ、患者ノ位置ハ橫臥ニシ局處ヲ消毒シ、次ニ上膊ヲゴム管ニテ結紮シ、撓骨動脈ノ脈搏ヲ檢シ、左手ノ中指及示指ニテ靜脈ヲ固定シ其部ノ皮膚ハ指ニテ針ト反對ノ方向ニ緊張ス

刺入方法ハ徐々ニスベシ、刺入ノ正シキヤ否ヤハ刺入時ノ手ノ感ジニテ凡ソ知ラルベシト雖、之レノミニテハ不充分ナリ刺入後一度靜脈刺針ノ後端ヨリ血液ノ流出スルヤ否ヤヲ見ルベシ又流血ヲ見ルモ未ダ必ズシモ正シク刺入セルノ證タラズ針ノ尖端ガ全ク脈管內ニ入ラズシテ半バ管外ニ開口スルトキモ流血アルベシ、故ニ流血ヲ見テ尙ホ少シク針ヲ差入ルベシ

又刺入ノ正否ヲ檢スル爲ニ上膊ノゴム管ヲ去リタル後ヲ先ツ食鹽水ヲ少シク注入シテ局處ノ膨ル、カヲ試ムベシ、然レトモ亦脂肪實ノ人ハ皮下ニ少量ノ液ガ漏ル、モ膨レザルコトアリ、故ニ始メニ必ズ一度流血スルヤ否ヤヲ檢スルヲ安全トス

藥液注入ノ前ノミナラズ所定量ノ藥液注入ヲ了リタル後ヲニ少シク食鹽水ヲ送入スルヲ可トス

若シ脈管小ナルトキハ外科手術的ニ皮膚ヲ切開シ脈管ヲ現ハシテ刺入スルノ止ムヲ得サルコトアルベシ但シ此場合ニハ術後ノ病毒侵入又ハ「トロンボーゼ」ヲ生スル等ノ危險アリ、「トロンボーゼ」ハ皮膚切開及傳染ナキトキハ起ラズ、例ヘ起ルニシテモ小ニシテ無害ナリ

注射器ノ選擇。ジュライバー氏注射器ハ助手ノ手ヲ借ラズシテ、左手ニテ注射針ヲ固定シ右手ニテ子ヂヲ廻シツ、注射スルヲ得只不利ナル點ハ針ノ

動キ易キヿト槓杆作用トニヨリテ針ガ脈管ノ對壁ヲ貫通スルコトアリモシ針ト圓筒トノ間チゴム管ニテ連續スルトキハ針ノ動搖ヲ防ギ得レドモ血ノ見難キ缺點ヲ生ス

二、ワイントラウト氏ノ注入器硝子製トリヒテル二メートルノゴム管及靜脈穿刺針ノミヨリナリ用法單純ニシテ動搖ナシ但シ必ズ助手ヲ要ス又患者ハ大量ノ藥液注入ヲ直接ニ目擊スル故精神感動ヲ起シ易シ又始メ硝子圓筒ニ連續セルゴム管内ノ氣泡ヲ除クコト、血ヲ見ルコト等少シク困難ナリ又藥液注入後ニ食鹽水ニテ靜脈刺入部ヲ洗滌スルコトモ少シク面倒ナリ

三、井上式食鹽水注入器　モ此目的ニ適用セラルベシ只タ此器ハ基底部廣クシテ基底部ニ藥液ノ殘ラザル迄注入セントスレバ空氣ヲ送ルノ恐レアリ若シ此器ノ基底部ヲ狹ク改造セバ可ナラン、此方法ハ左手ニ針ヲ支ヘ右手ニテゴム球ヲ握レバ足ル故ニ必スシモ助手ヲ要セズ

之ヲ要スルニ何レノ器械ニモ各一得一失アリ要ハ各自ノ使用ニ慣レタルモノ最モ可ナラン只タ初メテノ人ニハワイントラートル氏ノ「イルリガートル」式ノモノ最簡單ナラント信ズ

注射液ノ溫度ハ血溫即チ卅六—卅七度ナルヲ要ス卅五—卅度位迄冷却スルコトハ差支ナケレトモ卅七度ヨリ高溫ハ不可ナリ、モシ高溫ナレバ顏面紅ヲ潮シ頭痛ヲ訴フルニ至ルベシ

靜脈内注入ノ特別禁忌症　第一禁忌スベキハ心臟及脈管疾患ナリ、神系疾患ニテハ皮下及筋肉内注射ニ差支ナキモノハ靜脈内注射ヲモ行ヒ得ベシ、反之心臟疾患ニ於テハ然ラズ例ヘ調節作用行ハレ皮下及筋肉内注射ニ差支ナキ場合ニモ靜脈内注射ハ行フコトヲ嚴禁ス

靜脈内注射ハ其効力尤モ確實ナレモ持續的ナルカハ不明ナリ、一回ノ注射ニシテ全治スルモノアランモ普通ハ一回ニテハ不充分ナリ、否ナ寧ロ大多數ニ於テ反覆ノ必要アリ

終リニ一言諸君ニ希望セントスル點アリ即チ根治ニ關スル問題ナリ持續効力ノ有無ハ尙ホ長年月ヲ待テ始メテ確定スルヲ得ベシ斯ノ如キ長キ觀察ハ大病院ニ於ケルヨリモ寧ロ開業實地家諸君殊ニ町村ニ居住セラレ患者ノ消息ヲ克知セラルヽ諸君ノナシ得ラルヽ處ナリ故ニ望ムラクハ實地家諸君ハ注射後出來ルタケ長ク患者ヲ觀察シテ最後ノ成績ニ注意セラレタシ、之レ學問ノ爲メ將又タ患者ノ爲メ大ニ有益ナルコトナリト信ズ若シ夫レ實際施療ヲ要スル程度ノ貧困者ニシテワ氏反應ヲ檢スルノ必要アルモ檢査料ノ爲メニコレヲ行フ能ハズト云フガ如キ場合ニハ吾人ハ出來得ル限リ諸君ト共ニ患者ノ便益ヲ計ラントス　（完）

●『サルヴルサン』使用上二三の注意

秦　佐八郎

「サルヴルサン」ハ亞爾加里性ニシテ用ヰ殊ニ強亞爾加里性透明溶液トシテ充分ニ稀釋シ靜脈内ニ注入スルコソ最理想的ノモノナリトハ當初ヨリ余等ノ主張セシ處ナリ然ルニ中性乳劑ノ無痛皮下注射法ノ評判ノ爲メ余等ノ主張ハ暫ク壓倒セラレタル狀況ナリシガ近時ニ至リテ獨逸ニ於テモ中性乳劑ノ弊害明ラカトナレルト共ニ再ビ靜脈内注射法ニ復歸セリ斯ヲ以テ余ハ直チニ同僚諸君ニ靜脈内注射ヲ推奬セルモ未ダ甚ダ多ク用ヰラルヽニ至ラザルヲ遺憾トス。左ニエールリツヒ氏近信中ノ一節ヲ公ニシ同氏ノ現在ニ於ケル意向及ビ殊ニ靜脈内注射法ニ關スル一二ノ注意ヲ同僚諸君ニ紹介シ茲ニ重テ靜脈内注射ヲ試ミラレン事ヲ望ム

尙ホ近時「サルヴルサン」ハ各管〇、一乃至〇、六ノ容量ノモノ發賣セラルニ至リ内外地實家ヨリ度々耳ニセル希望ヲ滿タサレタリ然レドモ〇、一乃至〇、三ノ少量管ニ至リテハ小兒ニ用ヰ又ハ〇、六ニテ足ラザル場合ノ補足トスル爲メニシテ決シテ斯ル少量ヲ始メヨリ反覆使用スルガ爲メニ造ラレタルモノナラザルベシト信ズ

エールリツヒ氏近信中の一節

（前略）「サルヴルサン」療法ニ就テハ中性乳劑ガ少ナカラズ障害ヲ來タセルヲ遺憾ニ存候貴下ハ實ニ當初ヨリ乳劑ノ吸收不良ナルベキ義ニツキ顧慮セラレタルモ一方ウエキセルマン氏ノ報告ハ「スピロヘーテ」ノ迅速ナル撲滅及ビ症狀ノ治療上乳劑ノ良好ナルヲ賞讃セリ。而シテ今ヤ爲メニ來リシ不快ノ結果即チ壞疽及ビ完全ナル持續效力ノ點ニ關シテハ御互ニ其責ヲ負フニ立至リタル狀態ニ候

ドウホーー及ビデエル氏等ガ用ヰタル酸快水溶液ノ方マダシモ中性乳劑ヨリハ宜シキ結果ヲ得居候但シ肩胛下ノ乳劑ハ實ニ全然落第セシ者ニ有之候。而シテ藥品ノ使用拙ナル人ダケ爲メニ益々多クノ惡結果ヲ得隨テ非難ノ叫ビモ大キク有之候靜脈內注射ハ無論遙カニ有利ニ有之候尤モ只一面ノ注射ノミニ止メズ少クモ二回反覆セザル可カラザル次第ト存候靜脈內注射ニ就テ一定ノ過失ヲ防遏スベキ必要ノ點有之候ニ就キ特ニ左ニ申述ベ度存候

（一）溶液中ニハ決シテ不必要ナル過量ノ「ナトロン」ヲ含有スベカラズ爲メニ靜脈血塞ノ發生ヲ誘フ事アリ

（二）食鹽水ハ〇、九％ヨリ〇、六％ニスルヲ可トス

（三）特別ニ必要ナル注意ハ溶液製造ニ使用セラルヽ凡テノ蒸餾水ハ必ズ新鮮ナル者ヲ用ヰ決シテ黴ビタルモノヲ用ユベカラザル點ニ有之候ウエキセルマン氏ハ此點ニ關シテ注意シ余モ又コハ極メテ重要ナル義ト存候此頃ドレスデンニテ一醫師ハ其靜脈內注射ヲ行ヘル患者ノ全部ニ於テ最モ嫌忌スベキ反應即チ下痢（二十回迄モ來リシアリ）。八日間持續セル重症狀態ナドヲ經驗致候然ルニ同醫師其後他ノ藥店ヨリ蒸餾水ヲ購入セシ以來斯ル反應ハ全ク起ラザルニ至リ候

貴下ガ貴國ニ於テ靜脈內注射ヲ推奬セラレ候義ハ小生ノ最モ喜ビトスル處ニ有之候尙可成其普及セン事ヲ切望致居候（中略）當方ニ於テ馬ノ胸疫ニ使用シ極メテ良結果ヲ得タル事ハ貴下ニモ興味有之ベクト存候馬ニ用ユル適量ハ三百五十基瓦ノ體量ニ對シ三瓦（靜脈內）ニ有之候（後略）

（記者）

◎附言

「サルヴルサン」ガ黴毒治療トシテ特效的價値アルニ拘ラズ多少ノ論議ヲ存スルハ再發ノ有無ガ猶長時ノ觀察ニ俟タザルベカラザルト及ビ使用上未ダ研究ノ餘地アルヲ以テナリ。然レドモ再歸熱ノ治療藥トシテハ實ニ完全無缺ノ者也而シテ再歸熱ニ對シ絕對ニ靜脈內注射ノ方法ヲ採ルニ拘ラズ黴毒ニ對シテ獨リ筋肉內注射ノ先ヅ試ミラレタル所以ノ者ハ蓋シ靜脈內注射ニアリテハ其效力一過性ニシテ梅毒病原ノ如ク浸潤組織內ニ深ク潛在スル者ニ對シ充分其作用ヲ逞フスルヿ能ハザルベク筋肉內注射ニアリテハ其吸收元ヨリ緩慢ナリト雖モ爲メニ藥品ノ一部ハ暫ク局所ニ止マリ徐々ニ吸收セラレ效力持續的ナルト共ニ比較的大量ヲ處スルヿヲ得ルヲ勝レリトストノ見解ニ基キシナリ。此見解ガ多數ニ贊同セラレ先ヅ强「アルカリ」性透明液ノ筋肉注射ハ試ミラレ卓逸ナル效價ヲ示シタリ然レドモ疼痛ノ劇甚ナルヲ遺憾トセラレタリ然ルニウヰキセルマン氏ガ中性乳劑ヲ創始スルニ及ビ疼痛輕微患者ニ依リテハ殆ンド全ク疼痛ヲ感ゼズ而カモ效力ニ差異ヲ認メズ加之皮下ニモ注入シ得ル等使用甚ダ簡易ナリト云フニ至リ聲名隆々トシテ他ノ凡テヲ壓倒スルニ至レリ。然ドモ此中性乳劑ヲ以テ吸收不良ノ惧レアリトナス者ハ若シ吸收最モ可良ナル强亞爾加里性透明液ニシテ疼痛ノ爲メ用フベカラズンバ寧ロ强亞爾加里性液ト中性乳劑ノ中間ニ位スル濁濁液ヲ用フルヲ勝レリト爲セリ是レ該液ハ疼痛敢テ强カラズ而カモ吸收ハ中性乳劑ニ比シ大ニ良好ナルベキヲ以テナリ。

而シテ秦氏ハ前文ニモアルガ如ク初メヨリ亞爾加里性液ヲ以テ勝レリト爲シ殊ニ透明液ノ靜脈內注射ヲ以テ理想的ノ者トナシタリ加之筋肉內及ビ皮下注入ニアリテハ藥品ノ一部局所ニ殘存スルヲ以テ其一部分徐々ニ分解シ

亞砒酸等ノ如キ强毒物ニ變ズル恐レ無キヲ保セズト危惧シタリ。果然局所注射部ノ壞疽、不完ナル持續效力等不快ナル結果ヲ續出セルコトハエールリツヒ氏ノ書信中ニモ明瞭ナリトス。而シテ今ヤエールリツヒ氏モ靜脈內注射ヲ有利トセラルヽコト前文ノ如シ。但シ靜脈內注射ニアリテハ其效力一過性ナルベキヲ以テ唯ダ一回ノ注射ニ止メズ少クトモ二回反復セザルベカラズトス。

余輩ハ嘗テ本劑ノ使用ニハ常ニ愼重ナランコトヲ望ミ且ツ殊ニ靜脈內注射ヲ行フニ當リテハ其手術最モ嚴正ナランコトヲ疾呼シタリシガ今ヤ獨逸ニ於テハ中性乳劑ノ弊害明ラカトナレルト共ニ靜脈內注射漸ク行ハルトセバ我國ニ於テ其然ルモ遠キニ非ザルベク余輩ガ望ミ且ツ戒ムル所ノ者殊ニ切實ナルヲ覺ユ。（醫事週報抄）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

漫錄

◉醫箴

同業者に對しては、彼此相恭敬するを以て第一の務と爲すべし、若し夫れ然ること能はざるも、必ず能く相忍ばざるべからず。

凡そ鄉井道を同するの士、輕侮傲慢すべからず、人と與にするは切に謙和謹愼を要す、年尊者は之を恭敬し、有學者は之に師事し、驕傲者は之に遜讓し不及者は之を薦拔す、此の如くすれば自ら謗怨なし、信に和を貴しと爲す也。（陳實功敏仁撰、外科正宗、原漢文）

予學に志してより以還、學問及尋常の說話を論ぜず、口舌を以て人と爭ふことを欲せず、我の見走にして彼の說非なりと雖も、彼猶ほ抗顏にして己の說を遂げんと欲せば、即ち姑く我不敏を謝して默す、敢て阿順するにあらず、口舌を以て爭論すれば、即ち往々君子の體を破れはなり、若し夫れ嫌疑を決し、是非を定むるに至ては、則ち必す筆墨を以て詳に辨す、高名の訂正を得んと欲すればなり。（片倉鶴陵撰、青囊瑣探、原漢文）

余、土生玄碩、少年京師に遊ひ、和田泰純先生に學ふこと凡そ五年、後大阪に遊ひて、奏を播州醫生高久修助に締し、眼科を討論す、修助は杉田元白の門人なり、余堅く漢說を株守し討論する每に、辯難辭數々屈す、遂に節を折て敎を乞ふ、修助曰く、子宜しく博く書を讀むへきのみ、何そ人に問ふことを之れなさん、余强請措かす、修助余か意の切なるに感し、筐中一書を出して之を與ふ、余之を讀むに、其說漢人の夢にも知らさる所なり、後五年解體新書刻成る、惠美三白一本を贈致す、是に於て始めて、修助與ふる所の書は、解體新書眼目篇たることを知る。（水野善麿撰、師談錄、原漢文）

醫か爲すの法、多語調笑し、談諧誼華し、是非を道說し、人物を議論し、聲名を衒耀し、諸醫を譽毀し、自ら已の德に矜ることを得ざれ。（遜思邈撰、千金方、原漢文）

翰墨射御醫卜より書計伶人に至るまて、均くこれ材藝なり、古より藝人多く道を學はす、故を以て其藝彌高して而て娼嫉彌多く、卒に以て相忌害するに至る、够からすと爲さす、亢倉子に曰く、道を同くする者は相愛し、藝を同しくする者は相嫉むと、亶に然る哉。（南部伯民撰、技癢錄、厚漢文）

先に黑川道祐と云名醫ありて、本朝醫考と云和醫の傳來を記したる書を著せり、好書なり、然るに其家の子孫より、先祖の事を顯したるとて書肆に

たより絕板にしたるは、『扨々文盲なる義にて、あきれ果たる鄙俗なり、辱しと禮を云べき所に、恩を讐にて報ずると云なり、彌和醫の不相知、やみ雲に成たるなり、あまり文盲なる事なり。（望月三英撰、鹿門隨筆）

醫者と醫者とは、職敵にて仲の惡きものなり、夫は俗子無學の者の事なり、學文をする者は、左樣の事可有儀に非ず、先方爭心ありとも、此方よりの仕向により、我を折らせる事なり、此方より爭ふ故に仲も惡くなるなり、かんにんすれば穩當にすむものなり、彼我を惡むと云とも、我忿心なしと云て、此方爭ふ儀なければ、先おのづと止むものなり、諺の歌に

犬と猿よめしうとにいしやと醫者

隱居當住さては同役

とて仲のわるきもの古より申傳たり、賤しき心より起るなれば、能々平生の心持いさぎよく立ふるまうべし。（望月三英撰、鹿門隨筆）

或人曰、甲賀健齋醫方紀厚を著して、友松子の書を誹し戸田齋宮非藥選を著し、讃醫厚泉非藏志を著し、畑柳菴斥醫斷を著し、小島泊玉傷風約言を駁し、多紀元簡疑脚氣辨惑編を著し、望鹿門古方者流を、草澤醫にしかすと叱られし類、皆職の敵の心より出る也。（三宅實撰、療治茶談）

小ざかしく猿利口の者は、已が智惠自慢のみして、療治をなすに、人竝に癒やすき病を、過中に癒しても、的中の本の療治とれもひ、醫驗を云まはり、明良の醫師の療治をも、已が心にひきあて、是も我ごとく治しやすき病を癒してこそ、大功の譽にいはれやすらんと心得、人間にあまり眷りたる人は世の中にあるまじきと、明良の醫師をそれみ、口にまかせていひまはる。（香月牛山撰、習醫先入）

また組合仲間の仕やうは、譬へは此方の出入る病家に、大病人ても有て、とてもいけさうも無い時は、早く用心して、彼の川柳に、『とゞめをば他人へゆづる匕かげん』と目立ぬやうに、彼組合の中の醫者を進めて、其れにわたし互にほめ合て、死ても恨の無きやうに、これも川柳に『變と云ふ逃道醫者は明ておき』と有如く、已がしくしりを押隱し、又死ても生ても、其病家を組合の内て持て居て、組合の外へ渡らぬやうにと、夫はく行屆いて、其計をする、若しひよつと、親類の勸とか、何とか云て、組の外の醫者にても掛ると、表方は何くわぬ貌に美しく、あしらつて、斷られても、やつはり日々に見舞ひ、其の内深切かほに持賞て、組合の醫者を見舞ふからに同道し、遠まはしに、右の親類から勸めて掛た醫者を、なかしおことを爲てつゝき出し、トウく其病家を、組合の中へ引たくり返すやうにする此狀か、さんと一町内の犬か、みな中善くして居る處へ、他町の犬の一匹も來ると寄たかつて嚙伏るやうな物て、犬は正直にわんく云て嚙合ふか醫者坊ともは、人しやに依て、さすかに嚙合はせぬけれとも、やつはり犬の境界て御座る、此方も、毎度犬醫者ともにかみ出された、覺にか有る、見すく此方の癒したものを、犬醫者ともに其功を奮はれたことも大ふある、何ても已か組合の病家は、外へやらす、他醫の病家をは、色々と祕術を回して、取やうに取やうにと計るて御坐る。（平田篤胤撰、志都乃石室）

古語に賢者在二于朝一、小人嫉レ之、美婦入二于宮一、嫉婦妬レ之と信哉、才學醫術兼備の醫、或は君寵を得る醫は、鼠輩妬て惡評する許か、毒殺せし事抔、昔より無にしも非す、故に衆人に勝し藩醫は害を脫る計をも亦ふすへし、近來東國の一藩醫、大夫人の寵を蒙るに從て、主君の用ひもよく、出頭して同僚を蔑にすれとも、一人として其意に逆者ふきは、奉公の進退此醫の敎に從故、一統に蒼鷹乳虎の如く怖て、賂せぬ輩は一人もふき也、何れの頃よりか、此醫大夫人に姦通せりと云風說起れり、其故は時々鍼を奉て、診視他の醫より暇入れは也、是全く同僚の者、威に押されて、面前にては平伏し、蔭より惡評して、出頭を退けんとする淺き思慮より出る也。（緒方惟勝撰、杏林内省錄）

物徂徠疾病ふり、望月三英來て之を診す、徂徠曰く、都下醫を業とするも

の勝て計ふべからず、然れども危急の時に臨み、死生を託すべきもの鮮し、死生命あり、唯子に託する、三英曰く、明、醫人多し、先生以て死生を託するに足ると爲す者は誰ぞや、徂徠曰く、薛立齋と、三英掌を拊て大笑して曰く、先生の所見何ぞ其卑ふるや、苟も薛を以て足れりと爲さば、則ち當今其人に乏しからず、爰ぞ以て醫無きを憂んと。

杉本仲溫は面白き人也目白壘に御小納戸役を勤る清水金治郎と云人勞症難治也仲溫も掛り其の官醫も寵臣ゆへ上意ありて悉く掛ると云ども治すへき氣色なく醫も難治として藥せす内壯翁と云人余をすゝめて診察せしむ余診察して大柴胡湯を處方す外醫に談せしに此衰へては如何ならんとうけかはす云壯翁又友人弘道をすゝむるも處方余同しけれは仲溫ヲ招テ兩ノ處方一也いかんと問ふ仲溫きゝて此衰疲に大柴胡湯を處するは深き思ふけれはすまし極て然るへしもし服して惡くは余又まかり出へし先余か言に任せて藥服すへし兩人同方ならは兩人にかけ玉へ二人相談せは此上猶可然と云て歸りたり爰に於て兩人の持とおり治療せしに惡寒次第にうすく通利よくして食もすゝみ出腹中和し氣力も出て咳も不出ふりたり二ケ月斗りに痳を上るやうにおりたれは溫氣惣身に發したり於是轉方して葛根眞武合方湯をすゝむ顯瘡いよ〳〵さかんに氣力彌出て出勤せり仲溫曰兩人の骨折ふれと余か請合すは斯はふるまし謝儀は吾こそ盛に玉はるへしと戲言せしと云談合せしことも戲れしことも時過て仲溫は短る人にはなけれとも官醫中の人物たることをしりぬ果して前條に述ふる如きの人也

この後八九年立て、泉本正助の子大病ふり、疫の症ふり、一醫誤ありて、虛勞咳痰の症として治療し、二十日あまりもへて咳甚しく、呼吸促迫。脈沈數、四體やせて危急に及ふ、官醫七人來り見て皆辭し去る、命今夕と云ふて、一人も藥を與ふるものふし、仲溫來りて、六ケ敷き症ふり、とても及ふましけれとも何か仕方もと云ひ、頭を低れ居し處に、岡本幽州余を同伴して行きぬ、余も見て危急とは思へとも、骨折ふは救もすへしと思ふ、始て仲溫に逢て其由を述けれは處方は如何にと問ゆゑ、これこれの處方ふりと、兼用まて嘶けれは、仲溫、大至極と云て、主人に向ひ必死は云まてもふし、此藥に死せは天壽と云ふ可し、任せ置て迷ふく治療させ玉ふへしとは云へり、こゝに於て余は、他の病人は門人に托しおきて、晝夜去らさること九日にして、藥效少しあらはれたり、曉に至り大汗海の如くにして、熱初めて發し、如狂ふりて病人ふとかけ出し、次の間まて出て倒れたり、家人驚き余か詰め居し一間に來り報す、よし〳〵藥初めて的中す驚くこと勿れ、我は初て安心の思ふりと云ふて、診察するに大によし、果して翌日に至り、食氣出て熱も盡てさめ、餘症皆去り、出入二十日計にして全治す、此間初め辭せし官醫かはる〳〵來り見て、人參の議論六ケ敷を、余堅く守てうけかはす、藥效八九ふけれは、任せはせしかとも、家人盡く迷て、人參を入れて服せしめよと云ふ、されとも余かきゝ入れぬによりて、親戚余にかくして、竊に人參を加るの評議風と耳に入りたり、因て藥は膝元につきつけて煎しさせたり、されと此人參のことも、仲溫折々來りて、余か議論に同意したれは、飲ませす濟たり、いかに余かすれとも、仲溫と云ふ當時流行の官醫のむもしふくは、余もかゝる大病を救ひ得んや、偖仲溫の私ふきことは、此時病家の主人及仲溫にも壘命ありて、たとひ仲溫斷ても、治療は任へしと有り難き壘命もたしかたく、仲溫も云ふ、其許の藥にて、やゝ驗あらんとする所にて、某の治療たるへしと、主人と共に打合せ、余も亦治しさへすれは、少の斟酌なし、不苦と云むきしか、不日に全快のよし聞しめし、仲溫召し出し有て、殊の外の壘命御ほめありけれは、人の大功を奮ふこと胸若しとありて、ありの儘、余か藥にて自分は見舞ひし迄にて藥せす、壘命もたしかたき故、主人と申合せ、私の療治と申上たり、實は鐵砲町小島蕉園か手柄ふりと申述たるよし、いよ〳〵仲溫の人とふりに感しあへりけり。（小島蕉園撰、蕉園漫筆）

同道親密の交誼は、醫として正に然かあるへきのみふらす、又醫師自らの

利益たるなり。吾人若し醫家の間に扞格を生するに至れる原由を尋ぬる時は、多くは醫師の間に和解すへからさる關係を附する所の公衆あるを見る。甲乙の縉紳、特に貴女の十分敬意を拂ふことなく、疾患不良の轉歸は、これを其罪に歸し前醫に對する不滿より、現在施治醫同樣の意見すらも枉けて傳へらるゝものにして、更に風説に依て全然誤謬の形式を以て他醫の耳に達せらるゝあり、その戒慎せさるへからさるや言を俟たす、然れは凡ての意見、就中前醫の下せる豫後及療法に關する一切の批評を避くへきなり。而して惡意なき言説の枉けて詳穩さるゝことあるを知らさるへからす。尚ほ單り言語のみならす、擧止、顏容も亦同道の不和たり、或は不和を意味するに至ることあるを知るを要す。醫若しその同業より有名無實の惡評を加へられたることを告くるものあらは常にこれと對談することを勉めよ、若し同道の精神あらは、必すや滿足の解決を得へきなり。（バイペル、醫師、千九百六年）

凡同道を卑ずる者は、即其道を卓するなり、而して又已を卑するなり。夫れ世人醫の過失を知ること愈々多く、醫を疑ふこと愈々多ければ、又總て醫術に信を減することを愈々多かるへし、而して普く醫に信を減するより、又各名の醫に信を減すへし、故に又其他醫を詆謗するの醫に於るも亦然り、又且醫の良否を論し、其過失を摘擧するは、固より世人の好む所に非す、醫自これを題起し、毀譽の端を啓くに非されは、誰か此に非々たらむや、故に一醫若し他醫を毀譽し、これに因て已を貴重ならしめむと欲するときは、唯無智短見にして徒らに私利を思ふの弊を露すのみ。（杉田成卿譯、フーフエランド、醫戒千八百三十五年）

世人は、內科醫と外科醫は、遙に其道を異にするを以て、軋轢を來す機會かるべしと考ふれとも、大病院に於て兩者の折合はさることは殆と除外例かき現象にして、こは自負と驕慢に依ること大かり、迅速且つ明確の結果を見るに慣れたる外科醫は、內科醫の更に觀察的にして批評的かる操作を侮蔑し、嘗てヂーフエンバツハさへも、內科の技術は吐劑及下劑を處方するに止まると謂へるか如し、然るに內科醫は外科醫を目して手工者に過きすとかす、蓋し兩者の正しきことあり、一方のみ正しきことあり、又兩者共に誤れることあらん、一方に於て他者を以て十分自らを解せさるものとかす所の疑念は、已に不興を生し遂に敵意を起さしむるに至り、氣質、教育、個人の傾向の差異、又朋黨の念もこれを助長して、相和するを難からしむ、又經驗の示す所に依れは、同僚の明白かる誤謬或は失敗せる手術等の眞に愚擧たるを傍觀するより危險かるはかし、品性下劣の人は決してこれを宥すことをせさればなり。（ショルツ、醫師と患者、千九百年）

若し醫家にして、平素公衆の信頼及ひ尊敬に於て、至大の遺產を受け、又前代の學者及ひ醫師より豐富の智能を享けたることを思はゞ、この財寶この共同の財產を保護し、且これを增長せんことを念とすへく、決して利已的の所行に依て、これを毀損することあるへからす、惟ふに、一人の醫師か一人の病者に對して、その信任を落すことは、延て總ての醫師の地位に對する地位に對する信用を損するものにして、その必然の結果として同道自ら相毀損するに至ることは、是れ同業諸士の宜しく知るへき所かり、是を以て俗人に對して、同業者の醫術的處置を誹謗し、或は輕卒不謹慎の言説をかすか如きは、醫家の最も嚴に避けさるへからさることゝす、若しその離離の點を見るときは、醫は寧ろこれを調停するを以て尊貴の義務と爲すへき也。（チユーリヒ醫師會地位條例、緒言、千九百十年）（刀圭新報抄）

◉杏林笑話

眞葛原卜庵

一　醫者の紀念碑

或る會で一人の醫者が曰ふに、世の中は大に不公平である、人は政治家と

か美術家とか學者とか云へば、直に記念碑を建てゝ其人に對して恩を謝するが、嘗て司命の職、救生の術ある吾人醫者に對して、斯樣な頌德碑を建た者あるを聞かずと大に慷慨した、處で傍人曰くさ、待つたゝ々々そんな事はない、我々は醫者に對して記念碑を建てゝ居るではないか、君よろしく墓地へ行つて見給へ、あそこに建てられたる石塔は、皆是れ醫師に對する記念碑ではないか、とやつた。

二　呑氣な往診

ドクトル、カルスなる醫者があつた、或る時途に友人に會したので近傍の料理屋に上つて酒を飲み始めた、處がカルスが僕はまだこれから八軒も病家を廻られればならないと云ひながら一向立ち去るべき氣色がないので、友人は時に遲いではないか、病家に行くなら早く行かないと遲くなるではないかと云へば、何あに構うもんか實は其八軒の患者の中五人は最早瀕死の病人であつて、誰れが行つたつて助からないものばかり、又殘りの三軒の患者は屈强な體格であるから、誰れがいつたつて死にやしないから大丈夫々々々、そう急がずに緩りと飲うトやないかと云ふた。

三　金貨の幻覺

或る精神學者のクリニツクに、酒客譫妄の患者に就てデモンストラチオンをやつた、處でこの患者は幻視幻聽がある、教授はそれを學生に示さうと思ふて患者に對してそれお前さんあそこの椅子の上を御覽！今あの人が一個の金貨を置いた、それ御覽、見へるだらう、早く取りに行かないかと云ふた、スルと此の酒客譫妄の患者はあたりに立つて居る學生をジロ〳〵見廻しながらイヤ〳〵金貨などは見へない、若しそんな物でもあれば書生さんの方が早くにポケツトに收めてしまひますとやつたのには滿堂哄笑を禁じなかつた。

四　亞砒酸中毒

ユンケン教授の宅へ或る友人が訪れた、其時教授は少し用が有つたので其友人を待たして置いたが、友人は客間の棚の上に甘さうな菓子があつたので一寸つまんで食つてしまつた、處へ教授がやつて來たフト棚の上を見ると今迄有つた菓子がない、これは何んでも此奴が食たに違ひない、一つ驚かして遣うと考へて時に君！棚の上の菓子を君は食いはしまいかと問ふたら、友人はイヤ僕は食はないと答へた、それならばよいが實は僕の宅には餘り鼠が多いので亞砒酸菓子を製して棚の上に置いたのだ、それでは鼠めが引いたのに違ひないと云ふが否や、友人の顏色眞ッ青となつて助けて吳れ助けてくれ亞砒酸中毒！僕は亞砒酸中毒だと大聲あげながらユウケンに「シガミ」附いた勢が餘りに凄じかつたので、流石のユンケンも辯解の言葉に窮したと云ふことである

五　失敗の往診

其名は逸したが、或る有名な大學の外科教授であつたが、其人は其技術の有名であると共に頗る貪慾なので有名であつた、或る時其人の處へ左の電報が來た。

誰某外科手術を要す、先生を御招ぎしたい、旅費共に謝禮は如何程の要求なるや返信を待つ

處で先生果して行くべきであるか、行くとすれば果して如何程を請求すべきかと考へたが、其誰某なる者は頗る金滿家で有と云ふ事を聞いたから、往診三千グルーテンの謝禮ですると返信してやつた、すると左の電報が來た、

有難、然し二千五百グルテンの謝禮で御出で下ださい

此に於て先生頗る立腹して、三千グルーテンなれば行く、然らざれば行かないと云ふてやつた、すると先方では驚いたと見へて三千グルーテン拂ふから至急來て吳れと云ふて來たから、先生頗る得意となつて急行列車で以て往診して、指定の場所に着いた、先生意氣揚々と車から下りて見ると多數の出迎人が待て居つた、すると其中の二三人がワツト泣き出したので、

能く聞いて見ると遲かりし由良之助！、實は誰某ある病人は前夜死んだのである、流石の先生もアツト思ふたが仕方がない、二十四時と云ふ無益の旅行をしたのが馬鹿らしくてならないが、最早や仕方がないのである、そこで先づ兎に角旅館へと着いた、すると誰某ある病家からは早速人がやつて來て、低頭平身して遠來の徒勞を謝して、病人は不幸にして昨夜死んだ故に二百グルーテンで先生の勞を慰するを得ば幸甚と云ふので、先生甚だ不平であるが、兎に角最早目的の病人が死だのだから仕方がない、滿々ながら其二百グルーテンで滿足して、次の日歸る事と決定したが、其地では有名な大先生が來たと云ふので、甲聞き乙傳へて、其土地の病人が續々序手の診察を頼みに來ると云ふ有樣であつので、先生兎に角不時の副收入が出來たから、内心頗る喜んで次の日一日診察して、又二三百グルーテンをうけたので目的三千グルーテンは當がはずれたが五六百グルーテンを懐中して、まづは聊か不平を慰するに足ると云ふので、其次の日に歸るべく停車場に行つた、すると一人の風體怪げなる男が、先生の顔を見てはニヤニヤと笑うて居る、擯に障てたまらんから是れを避けると、又何時の間にやら傍にやつて來て、先生の顔を見てはニヤ〳〵と笑うて居るので、餘り腹が立つてたまらんから、何んだ貴樣は已れの顔を見て笑うて居る、トンチキ奴と怒鳴附けた、お此男驚くかと思ひの外、ニヤ〳〵笑ひながら、お前さんは昨日來た先生は餘程トンチキだ、祕密を知らないで、餘程トンチキだ、に歸りの御土産に云ふて上げやうか、お前さんを此方迄呼んだ誰某は活きて居るのだよ、と云ふから、先生驚いて死なない者なら何んで診察をさせないのだと問ふと、彼の男ソレダカラ餘程トンチキだと云ふのだ、昨日先生の旅館で安價に見て貰つた病人の中に誰某も居つたのを知らないか、と云ふや群集中へ隱れてしまつた、流石の先生も唖然として開いた口が塞がらなかつた、と云ふ事である。

喫煙嫌のミュルレル氏

誰でも名を知つて居る、大學者のヨハン子ス、ミュルレルは風采など少しも構はないで外套は歪がんだなり、半つぶれの高帽子を頂いて、それで頗る氣せはしない人であつたと見へて、教室へ來るのを見ると、半ば舞蹈の體である、處が先生煙草が大嫌である、教室へ入るやいなや、鼻を突き出して、煙草の香を檢するのである、若も一隅に於て煙草の餘煙が少しでもあると見ると、諸君講堂は煙草室ではないと云ひながら、例の半つぶれの高帽を頭にばうりのせて、蹈るが如く出て行つて仕舞うことが度々あつた。

處で解剖室では、古來屍臭を避ける爲に、學生に喫煙が默許してあるが、學生の方では先生は煙草は嫌いであると云ふ事を知つて居るから、先生が來る前にあると處にスパ附くのである、是には先生如何ともする事が出來ないが、先生も亦是に對する謀を知つて居るのである、どうするかと云ふと、解剖をやつて居る學生の處へやつて來て、何うして解剖して居るかを見るから、種々ある問を發する、學生は答へればならないから、口にして居る煙草を傍へ置く、すると先生其煙草を指で摘で、吸口の方で解剖して居る屍をこづきながら、君！此の筋肉は何んと云ふのだ、君！是れは何んだと、聞くから喫さしの煙草は穢ないなつて、二度と口にする事が出來なくなる、斯して一人々々煙草を潰して廻る者であるから、是には學生も閉口した、されで兎に角解剖教室に於ては彼れは喫煙を禁ずる權利は持つて居ないが、喫煙を禁じさせる方法を持つて居ると云ふて、先生が來る前にあると、盤と盛に煙を上げる、先生來たと云ふと、ソレと云ふので皆喫さしの煙草を揉消してポケットの中へ隱す事となつた。（刀圭新報抄）

◉島田吉三郎君

本校卒業生にして現時新潟醫學專門學校の解剖學教授たる仝氏の人格の高きこと。學識の博きこと。研究に熱心なること世既に定評あつて

亦余輩の喋々するを要せず果せる哉昨秋の醫海時報は之を叙することを詳かり吾人之を讀んで快感措く能はず直ちに本誌上に轉載して會員諸君に其樂を分たん筈なりしに編輯の間違によりて今迄之を果さゞりし罪は深く會員諸君に謝する所なり今之を左に轉載す

▲新潟醫學專校の教授として、解剖の受持として島田吉三郎なる人が任命された。官報紙上で此の辭令に接した斯界多數の人士は、定めて首を傾けた事であらうと思ふ。蓋し君は今日迄は全く無名の士であつた。何處の出身で、如何なる經歷を有し、又如何なる解剖學者であるかを知つてゐる人は殆んど無いのである。此無名無位の士が突然として新たに開校せられた新潟醫專校の教授といふ名譽の地位に上げられたのであるから、世人が首を傾け、目を瞎くのも當然の事である。斯く無名の士が何故に斯る榮職に就いたか、此人は果して斯る榮職に就き能く其地位を辱めざるだけの人格を俱有し學識を有して居るのであるかは、多數の人士が正に聞かんとする所であらうと思ふ。

▲君は長脇差の上州に生れた人である。明治何年生れであるかは記憶せぬが、何しろ未だ若い、三十五六歳であらうと思ふ。幼少の時に父母を亡くして孤兒となつた。叔母は之を憐みて、擁して富山の片田舎なる自分の家に連れて歸つた。天成の可愛らしい兒であつたので、叔母君に非常に寵愛されて、叔母君の良人たる義理の叔父にも愛された。學齡にあつて、不完全なる田舎の小學校で教育を受けたが、近處の田伍作の悴などとは自ら撰を異にして、學業が優等であつた。それに體質の弱い爲めか、群童と嬉戯するよりかも、獨りで讀書などするか樂む側であつた。長ずるに及んで神童といふ程でもないが、普通一人前だけの成績を得た。何しろ田舎の事だから、殊に其時代は學問をする者も少かつた頃だから、小學の同窓などは多くは學を廢し父兄の業務を助けるのであつたから、叔母君も君をして高等の學校へ行かしめずに、家業を習はさせうとしたのであつたが、君は強いて高等の學問を修めたいと言つて、遂ひに金澤に出でゝ醫學專門學校に入學した。叔母君も仕方がないから、不自由な中から學資を給した。君の學資は他の一般書生のやうに富裕ではなかつた。何れかと言へば乏しい方であつたのだ。然るに君は其等に頓着なく、眞面目に勉強したので、明治三十年に同校を卒業して醫師の免狀を受取つた。この時代に卒業したものは相當の賣口もあり、開業しても可なりにやつて行けたのであつたが、君は尙ほ研究したいといふので、東京に出で永樂病院の醫員となつて、熱心に內科を研究した。同窓の友は皆ヤング、ゼンツルマンで相當の美衣食をやつてゐたのであるに、君は此時代には本郷に間借りをして自炊生活の極めて質素な衣食に甘んじて居つたのは心ある者の敬服して居た所であるが。或者からは意氣地なしなど輕蔑せられたのであつた。其後再び金澤に歸つて、母校に入りて內科診斷學の講師となり、又或人と共同に開業もして、可なりの收入があつた。叔母君や妻君なども非常に安心をし且つ喜んで居つた。

▲然るに久しからずして君は其收入と其地位とを恰かも弊履の如く拋ちて京都へ出かけた。知れる人は殆んど呆氣に取られたのであつた。京都へ出て何をするかと思ふと、京大の解剖學教室へ入りて、一年の間無給で助手の職をやつたのである。普通人間から見ると君の意を肘度し兼れたのは寧ろ當然の事である。學世利を是れ事とし、少しにても金錢を多く得んとしつゝある今の世に、若い者が二百圓以上もあつた收入を拋つて、無給の地位に入り、而して將來好望な學科から格別、混沌として餘り金にもなりさうもない解剖學教室に身を投じたのであるから、正氣の沙汰ちやないと評した者もあつたらしいのである。

▲併し君は正氣の沙汰であつたのだ。平氣で一年間無給助手を勤めた。而かも忠實に勤務した。さうして與へられたる問題に就ては、隙を盜んでは鋭意研究に從事した。衆に先んじて投學し、衆に後れて教室を辭した、人

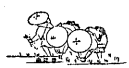
は君が爲め其健康を害せずは幸ありと氣遣つた位に勉强をしたのであつた決して氣が違つたのではなかつたのである。

▲何故に君が斯く飄然として內科を去つて解剖學に志したかといふに、君の性質上斯くせざるを得なかつたのであるらしい。君は極めて眞面目な、誠實な、正直な、篤實な、惡く言へば小心な人である。故に內科醫師として患者を預るに堪へ得なかつたのである。君は嘗て斯んなことを言つて居た。

患者を托せられても、ヨイ加減にやつて置くなら何の苦勞もないが、自分には左樣な事は出來ない、一旦患者を托されたら、其責任を思ふものだから、其患者の病症のみを考へて、片時も心を安んずる事が出來ない、爲めに身神を傷るに至るのである。故に實地家となる事は到底堪へられない。

實際醫師が、其責任を考へたから、實地家たるものゝ身神を害するは當然である。君の如く篤實な考へを持つては、君の如き蒲柳の質には堪へられるものではあるまい。解剖學に入つた一事が君の全人格を活現してゐるのである。

▲解剖學に於ける君の年齒は尙若く君の學問は未知數に屬してゐる。然るに斯く榮譽ある地位に推選されたのは、全く先輩が君の人格を認めたからである。新潟醫專は良敎授を得たものと言はればならぬ。君たるもの先輩の知己に感じ、宜しく益々人格と學術を磨かん事を希望する。



內地雜報

◉聖恩枯骨に及ぶ

去る六月一日故從四位松平昭訓以四下十五名の碩學者又は勤王の志士に對し、特に贈位の愚命を下し賜りたり、宗秩寮に於ては夫々位記を轉達せりと云ふ。中に我杏林の士にして等しく這の御沙汰に接せる故人の略歷等は左の如くなり。今更に聖慮の程拜承するだに恐れ多きことどもなり。

贈正四位　貝原益軒

貝原篤信字は子誠、益軒又損軒と號す、寛永庚午十一月十四日筑前福岡に生る、十九歲にして武州河崎宿に於て祝髮し、桑齋と號し、醫を志し、寛文八年三十九にして東髮し、久兵衞と云ふ、初め陸、王の說を唱へ後ち程朱の學を尊信せり、著書數百卷、多くは書するに國字を以てし、人皆之を便とす、元祿庚辰年七十一、致仕すと雖も猶功を賞して祿を賜はる、正德甲午四年八月廿七日病て歿す、享年八十五、著書の中にも「大和草」「藥譜」「本草綱目和名目錄」「日本醫譜」「先哲叢談」等最も顯はる

贈正四位　桂川甫周

甫周名は國瑞字は公鑑月池と號す、曾祖甫筑より四世、蘭流外科を以て幕府に仕へ、甫周に至り殊に名を擧ぐ、天明三年二月法眼に叙せられ、寛政四年魯西亞我漂民を松前に送致す、時の執政等未た其の事情に通ぜず、世論淘々たりしが、甫周乃ち之を蘭書に徵しロシア志一卷を抄譯し、新將軍家齊の弊政改革の際に資する事多かりしと、再び侍醫となり重す

ぜらるゝに至る、先是幕府の醫學館に外科を教ゆ、外科教授の始とす、文化五年六月廿一日病て歿す、年五十九、著書數十卷「蘭學事始」「和蘭藥通」十卷「海上備方」七卷「魯西亞明記」「北樣聞略」等最も知らる。

贈正四位　大槻玄澤

玄澤名は茂實字は子煥、磐水と號す、祖七世の孫玄梁に至り醫を業とす、一の關侯に仕ふ、玄澤は其の子なり、玄澤年甫て十三藩醫建部氏に就て醫を學び、杉田玄伯江戸に蘭醫書を講ずるに至り都門に入りて潛心蘭醫學の研究に耽る、後ち蘭化に學び、名勢漸く顯はれ仙臺侯擢て侍醫とふす、文化八年幕府命じて蘭書を飜譯せしむ、後ち藩侯班を同藩の番頭次席に進め食祿三百石を食む、文政五年幕府玄澤の蘭書飜譯の勞を奬して特に月俸五口を賜ふ、文政十年三月歿す、享年七十一、長男茂楨業を繼ぎ次子磐溪儒を以て別に家を成し、名あり。今の如電、文彥兩氏は磐溪の子なり。玄澤に著書三百あり、就中「蘭學階梯」「解體新書」の重訂、「瘍醫新書」殊に苦心十年、稿を易る三たびにして遂に「重訂解體新書」十四卷を大成せる其他「蘭學摘芳」四十卷「蘭說辨正」一卷「痲疹啓迪」四卷「痘瘋病因集說」「環海關異」十五卷等最も世に重んぜらる。

贈從四位　海上隨鷗

隨鷗本性は稻村名は箭、三伯と稱し因幡侯の醫員たり、磐水の「蘭學階梯」を繙いて發奮江都に出で磐水の門に入り、蘭學を研究し未だ蘭學辭書ふきを慨し、蘭人ハルマンの辭書を譯し遂に譯語八萬餘を收め、寛政八年始めて活版とふし、江戸ハルマと唱へらる、蓋し蘭人ドーフ長崎にありて同辭書の對譯ありしを以て此の稱ありしふり、隨鷗此の書を公にするや、蘭學志望者の渴仰旱天の甘露の如かりしと、隨鷗故あつて仕を致し、總房の間に漫遊し、名を海上隨鷗と改稱、後ち上洛して蘭學を唱ふ、門に集るもの數百人、時の名士等多く出入す、京畿に蘭學の門を張れる隨鷗を始めとす、當時宇田川榛齋の有爲にして活計に苦しめるを憐み、杉田玄伯と謀り蘭學備譯し糊口の資を得せしめたり、隨鷗のハルマ和譯解の著の如き榛齋の興りたる事多しと云ふ。榛齋は後ち隨鷗の斡旋により、宇田川槐園の嗣を承けて名勢を馳するに至る、隨鷗人を見るの明ありと云ふべし、文化八年正月歿す。

●學位授與

去る六月廿六日午前十時文部省に於て左の六氏に對し學位授與式を學行せられたり

△東京醫科大學助教授　鹽田廣重（外科學）
△同　上　長與又郎（病理學）
△樂山堂病院副院長　中原德太郎（外科學）
△開業　守屋伍造（內科學）
△同　上　土肥章司（皮膚科）
（以上東京醫科大學にて決定）
△大阪高安病院副院長　高安六郎（外科學）
（京都醫科大學にて決定）

●新博士略歷

▲長與又郎氏　は故玄齋翁の遺子で胃腸病院長たりし長與稱吉氏の弟に當り氏の一門は醫學界に對しては最も深い關係のある家柄である。氏は三十七年醫科大學を卒業し直ぐ樣病理學の助手とふり四十年講師とふるや獨逸に遊びフライブルグ大學のアッショフ氏に就いて病理學を研究し後ちベルリン大學のオルト氏の講義を半年ばかり聞き四十二年歸朝して助教授とふり、一昨年の暮心臟病、肝臟病に關する論文を提出し博士會審査を經て今度醫學博士の學位を授けらる。

▲鹽田廣重氏　は三十二年醫科大學を卒業して外科の助手となり三十六

年助教授に進んで四十年四月獨逸に赴き、ウヰン大學で世界に於ける外科學の泰斗たるローレンス氏に就きて外科學を專攻し業を卒へて四十二年九月歸朝して依然醫科大學に奉職し外科學に關する論文を提出して登第せらる。

▲守屋伍造氏　は代議士守屋此助氏の令弟で、三十年醫科大學を卒業するや直ちに傳染病研究所に入りて專ら細菌學並に內科を研究し、三十四年ベルリン大學で肺結核を研究し業を卒へて歸朝し、後ち北里博士の養生園で患者を診察し、それから愈々京橋區に開業し傍ら肺結核に關する論文を起草して、提出したるものが、審査の結果博士號を與へらるゝ事になつたのである。

▲中原德太郎氏　三十二年醫科大學を卒業してスクリツパ及び近藤博士の助手となり三十四年樂山堂病院に奉職し、四十年七月ウルツブルグ大學で病理解剖を、ハイデルベルヒ大學で、外科及び整形外科學を研究し、後ちウヰン大學のローレンスに就いて整形外科を專攻し四十二年七月歸朝し依然樂山堂病院で接診の傍ら「家鬼の骨端線切解後の治癒狀態」及び「骨膜材の注入に依れる骨新生に就て」外五篇の論文を起稿提出せられたり。

▲土肥章司氏　は醫學博士土肥慶藏氏の義弟で舊姓は栗田と云つた。氏は內務省の醫術開業試驗に及第し夫れより東京醫科大學の病理、細菌學の撰科を卒へ後ち皮膚科撰科に移りて土肥博士に其才能を識られ終に同博士の養子となり次でブレスラウ大學のナイセル氏について皮膚病及び秘尿病生殖器病等を研究して歸朝後麴町區に開業し其の傍ら皮膚病に關する論文を起草提出しこの度び博士號を授けられる事となつた。故に仝氏は醫學士でもなく又た醫專校の出身でもなく全く無官の篤學者なり

▲高安六郎氏　は大阪高安病院長の一族で醫學界には緣故深い家柄の人である。三十七年醫科大學を卒業ししばらく高安病院に居たが後チユビンゲン大學に遊びて病理學を研究し、歸朝後再び高安病院に奉職して病理學に關する論文を提出されたり

◉女醫現在數

去六月二十日迄の、內務省醫籍に現在せる女醫數は合計百六十八人にして、內九十餘名は東京、他は大阪、京都、名古屋の各大都市に開業せり。外國醫學校出身者十九名あり。此他に齒科女醫は十名あり。去三十六年文部省へ開業試驗の移りしより、今日迄に及第せし者のみにても百七十二人あるに登錄者の斯く少きは、未開業のもの多きが故なるべし。

◉京大の夏期講演會

京都帝國大學に於て昨年第一回夏期講習會を開催し、各科より碩學大家の講演ありて稗益する處頗る多きものありしが、本年も來る八月一日より三週間の豫定にて第二回講演會を開催し、我醫科よりは、左記演題の下に諸家の講演ある由。

一、生理學（十二時間）　教授博士　天谷千松

七日より十二日迄午前十時より正午十二時迄

一、人類の健康上に及ぼす嗜好品の影響に就て　教授博士　荒木寅三郎

一、未定　同　上藤波鑑

一日午前八時より同十時迄二日より五日迄は午前十時半迄

一、音樂才能と遺傳　同　上和辻春次

一、病氣と身體組織の變化　同　上速水猛

尙ほ聽講者は七月十日迄に申込むべしと、右講習會聽講者又は實習者に證明書を交附し聽講料は一科目二圓三科目以上五圓にして、聽講の爲め態々入洛の者は、京都帝國大學々生監に申込めば成るべく便宜を與ふる由。

●日本醫學會の授賞規程

同醫學會にては昨春大阪に開きたる第三回同會の殘餘金三千圓を第四回役員に引繼くと同時に之が處分方法に關して相互の役員に於て兼て協議中の處此程に至り懸賞を以て優秀なる業蹟を募集し該金額を分與するに決し此程左の如き授賞規程を汎く公にするに至れり

第四回日本醫學會授賞規程

一、此授賞ニ與ラントスル者ハ明治四十六年十月末日迄ニ演題及ビ演說ノ要旨ヲ記シタル原稿（共同業績ナルモ妨ゲナシ）ヲ本會ニ提出スベシ、本會ハ之ヲ其部門ニ屬スル分科會長ニ廻送ス

但シ原稿ハ圖畫表等ヲ除キ十三行三十字詰五十頁ヲ限トス

一、各分科會長ハ提出ノ原稿中ヨリ六人已內ノ演說者ヲ豫選シ、明治四十六年十二月末日迄ニ其原稿ヲ添ヘ會頭ニ報告スベシ

一、期日迄ニ報告ナキ分科會ニハ授賞演說ニ該當スベキ者ナキモノト認ム

一、會頭ハ各分科會長ヨリ提出セル豫選演說原稿ヲ取纏メ審査會ノ議ニ附ス

一、審査會ハ各分科會長及ビ會頭ヨリ特ニ推薦シタル審査委員若干名ヨリ成ル

但分科會長事故缺席スルトキハ代人ヲ出席セシムルコトヲ得

一、第一期審査會ハ明治四十七年一月中旬ニ開キ各分科會長ヨリ提出セル原稿ヲ審査シ授賞演說者ヲ豫選ス

一、審査會ニ於テ豫選シタル演說者ニハ總會又ハ分科會ニ於テ特ニ時間ヲ與ヘテ演說セシメ且ツ其日時ヲ豫報シ可成審査委員ノ臨席ニ便ナラシム

一、第二期審査會ハ開會第三日（分科會終了ノ日）豫選者演了後之ヲ開キ、豫選者中ヨリ授賞者及ビ金額ヲ決定ス

一、豫選以外ノ演說ト雖モ第二期審査會ニ於テ授賞スベキ價値アリト決定シタル時ハ授賞スルコトアルベシ

一、審査ニ關スル規程ハ第一期審査會ノ始メニ於テ議定ス

一、開會第四日（總會）閉會式前會頭ハ授賞者ノ住所、姓名、所屬分科會及ビ金額等ヲ報告シ賞金ヲ授與ス

一、授賞者ノ員數及ビ金額ヲ左ノ如ク定ム

一、金壹千圓　壹名
一、金伍百圓　貳名
一、金參百圓　參名

●北陸製乳株式會社

昨年二月より縣下石川郡畜業荳搾乳家に於て煉乳製造株式會社設立の計畫中なりしが愈同會社にては本年四月より惠比壽印煉乳の製造發賣をなすことゝなれり同會社は縣下石川郡松任町八ツ矢町元石川郡農學試驗場建築物を改築したる者にして瀉罐室、製造室、罐詰室、試驗室、事務室、倉庫其他を合せ目下建坪五拾餘坪なれども遠からず冷藏室等の增築をなす由社長爪長嘱三郎、專務取締役新谷嘉吉、取締役藥劑師藥學得業士倉重與三郎外四名監査役五名技師二名其他使役人等にして目下日々煉乳製造に供用する牛乳高は三石餘斗なり就業時間は目今の處午前五時より初め午後八時頃迄にて繁忙を極めつゝある由隨て同煉乳の賣行頗る好結果を呈しつゝありと云ふ

●藥學四三會

同例會は本月一日午後六時より西町金谷館に於て開催せり定刻に至り幹事林京次郎氏開會を告げ次て兩三氏の實驗談旅行談等あり終て同八時より晩餐會に移り散會せしは同十時過る頃にて盛會なりき當日出席會員は安田順太郎、林京次郎、山崎彦太郎、金谷季男、關戸辰次

郎、中村重好、鹽谷直作、森善次、林常雄（順次不同）の九名にてありき。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

外國雜報

●獨逸國軍醫の階級と其給料

羽太鋭治

獨逸の陸軍々醫の階級及び俸給に就て、Die Aerzte の著者は詳細に之を記載せり。衛生部省旅團編成は、四つの主ふる階級に分類されたり。

第一將官の位階を以て。

第二佐官の位階を以て。

第三大尉の位階を以て。

第四少尉の位階を以て。

第一の階級に於て、少將の位階を有するものは、陸軍々醫總監にして（現今は陸軍中將の位階を持つ）第二の階級に屬するものは陸軍大佐、中佐、少佐の位階を與へられたる陸軍々醫正とす。又第三の位階を有するものは本部附軍醫にして、こは陸軍大尉に相當するものふり。次に第四の階級に屬するは、陸軍中尉及び少尉に相當するものにして、陸軍二等軍醫及び助手醫ふり。其の他見習下士相當官として衛生部省に勤務をふすものは、三等軍醫及び一年志願の醫師竝びに衛生軍醫曹長ふり。

一千九百一年以降軍醫正は、各半分まで五千八百五十馬克及び五千四百五十馬克、本部附軍醫は三千九百及び二千七百馬克の給料を年々給與せられたるも、同時に軍醫正にありては、二等級に於ての配當は停止されたり。一千九百年の軍事務算給料の關係は次の如き規程となれり。

		毎月	千馬克
陸軍々醫總監は			
九人の將官醫の一等級は	同	六百五十馬克	
九人の將官醫の二等級は	同	六百馬克	
三十六人の二等將官醫は	同	五百馬克	
百四十八人の醫正第一給の第一級俸は	同	四百八十七馬克五十	
百六十六人の軍醫正第一級の第二級俸は	同	「アヘンニッヒ」四百五十馬克	
三十人の軍醫正の第二級の第三級俸は	同	三百二十五馬克	
百六十三人の本部附軍醫第一級俸は	同	三百二十五馬克	
二百六十人の本部附軍醫の第二級俸は	同	二百二十五馬克	
三百四十一人の二等軍醫は	同	百二十五馬克	
四百九十八人の助手醫は	同	七十五馬克	

其の上に尙手當と住宅料增收あり、獨逸帝國の多くの場所は、五つの手當の階級に分類さる、而して特等Aは、伯林、ハンブルヒ、ミュンヘン、ドレスデン、フランクフールト、スツツトガルト、ブレーメン、アルトナ、ストラスブルヒ、メツツ、シュルハウゼン等之れに屬す。最上級に向つての稅率及び最も低廉ふるは次に再び與へられつつあり。

	a平當の	b住宅料增級の	稅率は年々
軍醫總監	a 一九六二馬克	b 一五〇〇馬克	A
將官醫	a 一三一四馬克	b 一二〇〇馬克	V

二等將官醫（軍醫正、本部附軍醫）	a 九七〇馬克 b 九〇〇馬克	四三二馬克
二等軍醫、助手醫	a 五四〇馬克 b 四二〇馬克	三六〇馬克 二八八馬克 二一六馬克
一頭の馬に向ての厩手當		五〇、四〇馬克
各室に向ての工場手當		一、〇八馬克
軍醫總監の本宅手當		五九四馬克
佐官の位階ある衛生部將		四三二馬克
其他の衛生部將		二八八馬克
三等軍醫		一二六馬克

公然の助手醫の勤務をなす所の三等軍醫は、節約したる助手醫の俸給より、月々三十六馬克の給料を貰ふ。夫れによりて衣服費としての、九馬克の補償を得むと記されたり。

近時慢性疾患、殊に一般狀態に著しからざる障礙を有せざる學齡兒童の入院患兒に、正則的に學業を授くべしと云ふ問題が、多少の注意を喚起したるは喜ばしき現象にて御座候。アメリカ、ロンドン、フイラデルフイア等にては、既にこの設備を有する病院は多々これある樣聞き及び候。殊に股關節炎等にて病牀を離れ得ざるものには殊にその病牀に於て教授いたす由にて候

プロイセンに於ては統計上、年々死亡者の數殊に結核症、嬰兒死亡者の減ぜんとする傾向は全く治療院の增加に因するものなりとのことに御座候

第三萬國外科學會は本年九月二十六日より三十日までブリユツセル市に於て開催せらる、其の「プログラム」の主なるものは

宿題　肺臟外科及大腸炎

にて候

第十七回萬國醫學大會は一九一三年夏ロンドンに於て開催せるに決し候

ウヰーン產婦人科教授グスターフ、フオン、ブラン氏は八十二の高齡を以て白玉樓中の人と相成られ候

紐育には於ては一九一〇年五〇九三人の脊髓前角炎患者ありて內八二五名（一三・七五％）は死亡いたし候。殊に多かりしは九月にてペンシルバニア州のみにても一〇九七名（內一七二名死亡）有之候。

第十五獨逸婦人科學會は五月七日より十日までデーデルライン教授會長の許にミュンヘン大學にて開催せられ後、宿題は『結核症と女子生殖器との關係』にして宿題報告者はコング（ゲヨツチンゲン）フオイト（ハルレー）、クレーニツヒ（フライブルグ）諸氏にて候。

パナマ運河勞働者五〇八〇二人中死亡者は一九一〇年に於て五五八人（一・〇一％）にて內百人は〇・二六％あり。死因の最多きは赤痢、腸窒扶斯、『マラリア』にして『ペスト』及び痘瘡は一人もこれなく候。黃熱は一名これあり候

（醫事月報抄）

＊　＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊　＊

醫校雜報

海軍の二條例改正　海軍醫務局にて豫て調査中の醫專校に依托學生を置くや否やの件は種々議論ありしが明年より之を實行する事となりたり併し當分は官立校にのみ依托す、其員數は全部にて廿五名位なり、（十

四五名增加）尙補充條件も改正し、醫學專門學校卒業者は無試驗にて少軍醫に採用する事とせり、

清國留學生數　一時一萬近くの本邦留學清國學生を算したりしが、其後幾多の政變、感情問題等のため退學歸國し漸く當局の方針を批難する聲高かりしが、其後の動靜を見るに私立學校在籍者には移動多く、官立學校には其の事少なく、却て數に於て增加せりといふ、今昨年五月現在の各官立學校在學の留學生中、我醫科大學及各醫專在學者數を擧ぐれば左の如し。

三學醫科大學	七名
仙臺醫專校	二十六名
金澤醫專校	五名
千葉醫專校	三十六名
岡山醫專校	一名
長崎醫專校	十七名

此他各府縣立醫學專門學校、東京慈惠會醫專校等に在學せるものを合せ算せば、如上の數に倍加するものあるべし、

官立醫專と清韓人　今年の官立醫專校へ出願せる清人鮮人は四百七十八人あり、昨年より約百五十名減少し居れり。

南滿醫學堂　滿鐵が來九月より開校すべき奉天の滿鐵醫學堂の生徒を募集する爲め事務員を東上せしめ目下募集中ある事は既記の如くなるが募集入員豫科第一學年五十名ふるも、東京にて募集するは本科のみなり。出願期は來十五日にして、入學資格は日本人は中學卒業者及文部檢定に及第せし者清國人は中學同等の學力を有し日本語を解するもの、入學試驗は日本語、地理、歷史、數學、物理、化學、博物、外國語にして東京に於て試驗を執行する筈なり、又修業年限は醫科は四ヶ年ふるが、授業料一學年豫科二十圓、本科參拾圓、研究科五拾圓ふるも、本年の入學者には特に授業料を免除する由なり。尙ほ寄宿舍は目下建築中にして來九月迄に落成せしむる筈なるが寄宿料一ヶ月日本人六圓清國人小洋銀六元なりとは內地に比し割合に安價なりといふ可し。東三省總督趙爾巽氏を名譽總裁に戴く旨は曾て記したりしが愈々推戴する事に決せり、同學堂の職員は左の如し。

內科	學堂長兼教授	醫學博士 河西健次
眼科	教授	醫學博士 喜田村朔治
外科	全	醫學博士 尾見薰
細菌	全	醫學博士 安倍仲雄
全	全	醫學士 長岡義路
全	全	醫學士 稻葉逸好
全	全	醫學士 境岬
解剖	全（獨國留學中）醫學士 椎野銓太郎	
全	醫學士 林榮	
全	醫學士 倉持彥馬	
全	醫學士 汲田元之亟	
全	醫學士 戶谷銀三郎	
解剖	全	金澤醫學得業士 久保武
病理	全	大阪醫學得業士 村田宮吉
生理	全	愛知醫學得業士 久野寧
全	理學士 嶺亮介	

此他ノ教授助教授は人選中

稽查	汪翔
幹事	島根用三

評議員　提學司使　盧　靖
衛生醫院長　王　恩　紹
教育會副會長　曾　有　翼

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

學會

◉日本小兒科學會金澤地方會

同會は岡本京太郎氏前田道貞氏等發起となり去月金谷舘に於て發會式を擧げ會則等を議し今後大に斯界の爲め發展せむ筈。當日來會者は市内開業醫病院職員等三十餘名に達し會員の申込は既に多數有り尚ほ續々申込中との事なり今同會々則を得たれば左に揭ぐ

日本小兒科學會金澤地方會々則

第一條　本會ハ日本小兒科學會々則ニ基キ專ラ小兒科ニ關スル學術ヲ講究スルヲ目的トス

第二條　本會ハ日本小兒科學會金澤地方會ト稱ス

第三條　本會ハ石川縣在住ノ日本小兒科學會々員及本會ノ趣旨ヲ贊成スル醫師ヲ以テ組織ス

第四條　本會ハ毎年三回（三月七月十一月）集會ヲ開ク
但シ時宜ニヨリ斯道ノ名士ヲ聘スルコトアルベシ

第五條　本會ニ理事三名ヲ置キ會務ヲ處理ス

第六條　理事ハ庶務會計報告ヲ掌リ且ツ開會ノ場所及ビ時日ヲ撰定シテ會員ニ通報スルモノトス
但シ理事ハ當分金澤市在住ノ日本小兒科學會地方幹事ニ屬托ス

第七條　本會ハ會費トシテ壹ケ年金五拾錢ヲ前納スルモノトス

第八條　本會事務所ハ西町岡本京太郎氏方ニ設ク

第九條　此規則ハ毎年最終ノ集會ニ於テ決議ノ上變更スルコトヲ得

尚ホ役員選擧の結果岡本京太郎氏前田道貞氏洲崎歸一氏就任せらる

◉金澤醫學會

去三月十日午後三時より金澤醫學專門學校病理教室に於て開會演說如左

一、在獨雜感　日野一等軍醫
一、硫酸銅ノ消毒力ニ就テ　舘金澤病院醫員
追加　用吉二等軍醫
一、脊柱側彎症ノ自動的矯正法　三好三等軍醫正
一、乳兒期ニ發生セル所謂脾痃ニ就テ　岡本小兒科醫

◉北越醫學會春期總會

は去三月十一日高田に於て開會左の演說あり本年秋期總會は新發田に於て開會の事に決したり

一、男性「ヒステリー」患者ノ供覽　寺尾秀三
一、小兒白皿病ノ一例　武者素行
一、ヨンヂスク氏ノ脊髓痲醉ニ就テ　奈良眞三郎
一、三胎姙娠ノ診斷ニ就テ　宮川久平

討論

一、醫學上ヨリ觀タル心神喪失ニ就テ　廣瀨基
一、臍癌ノ一例　竹村顯齊
一、腹腔姙娠ノ一例　山縣直吉

一、小腦ト腦橋トノ一二ノ新連合ニ就テ　布施現之助
一、稀有ナル產科的二標本ノ供覽　瀨尾原始
一、膀胱腫瘍ニ就テ　池田廉一郎
一、野生ノ散瞳性植物及其標本供覽　田村眞實
一、西頸城郡磯部村ニ於ケル「ラヒチス」ニ就テ及ヒ二患者ノ供覽　丸山謙吾
一、揮發油ノ消毒力ニ就テ　今井潔
一、均衡障害描寫器ノ供覽　黑岩福三郎
一、眼科ヨリ見タル六〇六號使用上ノ注意　菅沼定男
一、一種ノ奇異ナル眼球結核ニ就テ　酒井新太郎
一、「サルバルサン、子クローゼ」ノ標本供覽　浦野多門治
一、血管硬變症ニ就テ　澤田敬義
一、失明者ノ原病ニ就テ　小島彥造

○本會員の學會演說要領

本會の會員にして去四月東京の各學會に於て講演せられたる所を左に摘錄することゝせり

●持續浴ト體重トノ關係

石川精一

精神病者ニ對シ持續浴療法ヲ施行セル際、其持續浴ト體重トノ關係ニ就キテ研究セルモノナリ。其方法ハ、食後一定時間ニシテ患者ヲ坐浴槽ニ入レ全身ヲ浸シ一分間後全身ノ濕レタル儘體重計ニ上ラシメ、測定後直チニ浴槽ニ入ラシメ爾後三十分每ニ同樣ノ方法ニテ體重ヲ測リタリ。溫度ハ三十五度乃至三十七度、時刻ハ都合上午前ニ行ヒ、持續時間ハ一時間乃至五時間。カクシテ得タル結果ハ。溫浴ニヨツテ患者ノ體重ハ安靜時ニ於ケルヨリモ著明ニ減少ス。其減少率ハ各個人各時間ニヨリテ差アレドモ第一時間ニ於テ最モ大ナルガ如シ。而シテ各病症及ビ患者ノ榮養狀態ニハ大ナル關係ナク。寧ロ主トシテ各個人ノ抵抗力ニ關係スルガ如シ

討論

▲松原三郎君　本研究ノ目的ハ持續浴ガ何故ニ精神病治法ノ一法トシテ效アルカ、及ビ精神病者ノ新陳代謝研究ノ一階段トシテ先ヅ持續浴ト體重トノ關係ニ就キテ試驗シタルモノナリ

●神經衰弱症ノ循環器系統ニ及ボス影響

福田美明

著者ハ金澤病院神經科ノ患者九五例ニ就キ脈搏脈波脈壓ヲ檢セリ。其中約三〇例ノ神經衰弱症患者ノ脈波弧線ニ特種ノ型アルヲ見タリ。一、上行脚ハ蹈働的ニ上昇シ然カモ一種ノ圓形ヲ帶ブ。二、下行脚ハ斜面的ニアラズシテ急劇ニ沈降シ彈力隆起ハ著明ナラズシテ次脈ノ上行脚ニ移行ス。一見熱性病ニ來ル重複脈ニ類似ス。著者ハコノ現象ヲ脈管壁ノ弛緩狀態ニ歸シ、進ミテ神經衰弱患者ノ循環器系統ハ一種「ヒポトニー」ノ狀態ニアリ心臟ニアリテハ心機亢進ノ主因トナリ脈管ニアリテハ一種固有ノ脈搏ヲ呈シ脈波弧線ニ特種ナル型ヲ與ヘ毛細管ニアリテハ皮膚紋畫症ノ主因トナルト結論セリ

●早發性癡呆ノ本態ニ就テ

醫學博士　松原三郎

早發生癡呆ノ原因ハ目下不明ニシテ固有ナル組織學的變化ナク、其本態ヲ

皆ナ止ムヲ得ズ生殖器或ハ甲狀腺或ハ腸管自家中毒ニ歸セントスルモ是レ非ナリ、演者ノ意見ニヨレバ、蓋シ早發性癡呆ノ本態ハ先天性ノ素質(Angeborene Disposition)ヨリ來ルモノニシテ一般ニ早發性癡呆ニ罹ル者ハ、小兒時ヨリ內氣ニシテ自家ニ蟄居シ他ノ兒童ト交際セズ、其趣味狹隘ニシテ獨リ自己ノ將來ニ就テ空想ヲ逞スルコトヲ唯一ノ樂トナシ從フテ我儘主義ナリ、而テ本病ハ西洋人ヨリモ日本人多ク西洋人中ニテモ猶太人ニ多シ、是先天的素因ニ基クガタメナリ、即チ早發性癡呆ハ性格ノ變性(Degeneration d. Charakters)ガ一定ノ刺戟或ハ誘因ニヨリテ更ニ增惡シタルモノナリ故ニ其治療ハ性格ノ矯正ヲ主トセザルベカラズ、然ルニ世人ガ徒ラニ臭素劑沃度劑ヲ投ジ、或ハ健胃劑ヲ與ヘテ榮養ヲ良クシ、或ハ下劑ヲ以テ自家中毒ヲ除キ、或ハ甲狀腺ヲ切除シ或ハ睪丸及卵巢等ノ製劑ヲ與フルモ更ニ效ナカルベシ、又早發性癡呆ノ節圍分類ニ關シテハクレペリン氏ニ首肯シ難キ點頗ル多シ、嬰スルニ、クレペリン氏ノ分類ニテハ單ニ早發性癡呆ニ類似セル諸多ノ病症ヲ混同セルモノニシテ、爲メニ或ハ治癒スルモノアリ或ハ癡呆ニ陷リテ不治ナルモノアリ早發スルアリ晚發スルアリテ其病型著シク不同ナリ

演者ノ意見ニヨレバコレ等ノ異型ヲ發病時ヨリ既ニ鑑別シテ早發癡呆中ヨリ除去スルコトヲ得ルナリ

討論

醫學士　石川貞吉

クレペリン氏ノ早發性癡呆中妄想性癡呆ト稱スルモノヽ中ニハ寧ロ偏執病ニ編入ス可キモノアリ、治療ハ教育療法必要ナレドモ實行ハ困難ナリ

醫學士　門脇眞枝

早發性癡呆ナル名稱ノ代リニ Psychiasthenie ナル名稱ヲ用フ可キコトヲ稱セリ

醫學博士　松原三郎

早發性癡呆ノ分類ハ種々アレドモ、要スルニ其必要ハ尠ナキモノトス、只ダ其原因及本態ヲ探究スレバ足レリ、又 Psychiasthenie ナル語ハ既ニ佛國ノヂヤネ氏 Janite ガ之ヲ强迫觀念性精神病ニ用ヒ世上又之ニ倣フ人アルヲ以テ此ノ如キ名稱ヲ早發癡呆ニ用ユル時ハ混雜シテ誤解ヲ招クノ恐レアルベシ

◉食品榮養及錢價ニ就テ

ドクトル　北豐吉
岩尾次郎

食品約八十ニツキ其成分ヲ測定シ一定ノ標準價格ヲ定メ榮養價値ヲ見其總テヲ總合シテ吾人ニ最モ經濟ナルモノヲ知ラシメ獨逸ニ於ケル類似ノ食品ト比シ價格ガ却テ日本ノ高キヲ述ベ一等讓步シテ日本ヲ安キト假定スルモ尙ホ兩國民ノ收入ヲ比スレバ日本人ノ食物ハ二倍三倍モ高價ナリト云ヒ國民榮養上大ニ考フベキ問題ナリトテ數十枚ノ精細ナル表ニヨリ說明セラレタリ

（未完）

校内雜報

◉明治四十二年度卒業生同期會記

五月廿七日、東都に遊學中ありし、山本直枝君の御歸澤上野善藏高儀京次再君の新に御來澤せられしを機とし歡迎會を兼ね明治四十二年度卒業生同期會を暎月藏町金城樓に開催、走せ參ずるもの無慮十有餘名。即ち山本直枝君、平手雅敏君(飯森病院)渡邊宗一郎君(淺野川呼吸器病院)丸山直友君(病理教室)上野善藏君、佐竹雅一君、織田信義君、松村喜一君、山田有登君、近藤清吾君(以上金澤病院)之なり、高儀京次君は止み難き事情の爲石川精一君(金澤病院)は微恙の爲御來會なかりしは遺憾なりき、開會は六時と云ふに幹事(佐竹、近藤)の吾等迄漸く六時に先づそろ〳〵出掛けやうかといふ有樣、今更ならねど日本人の時間を尊重せざるには困つたものなり幹事から掛値をいふが間違なり、掛値は直切らざるべからず、之からは正味正札にやつて欲しきものなりと少しは掛値を云つた幹事此處に厚顏しくも斯くは建言するなり、同勢相揃ふ迄は兩々相對して烏鷺を闘はすものなり、二三相倚りて諧謔談笑するもあり、山本君の新東下りの珍談、上野君の兵舍に於ける話やら、其他の學術談、世間譚、失敗談、自慢話、哄笑、揶揄、溫き集會の樂は盡きず、七時三十分頃漸く開會、型の如き幹事の挨拶、山本上野兩君の謝辭、膳羞は運ばれたり、御酌をするといふ何やらと申す愛らしきも來れり『オホン』と乙に氣取りて渴せる喉を我慢して先づ『チビリ』とやる先生もあり、『其後は久濶でしたれ、御珍らしき話もありませんかな』等とやるもあり、『現今喧しき六百六號問題如何』、等と眞面目に話して居る御仁もあり『諸君母校出身の洋行者も近時少しく增加して來たのは喜ばしい現象ではあるまいか、吾々もその内に一寸御隣りへ行つてこうかな』等とやつて呵々大笑する無邪氣の連中も有り、何がさて同窓生の隔てなさは親しきも疎ありしも相携へて談笑痛飲 ?) 浮世も他所に美はし花園に遊べる天の寵兒にも似たり。宴半にして珍客大阪より來り會するものあり、之を吉田隆二氏とさるす樂しき集會は茲に此珍客を得て話に花は咲けり。酒の甘き事蜜の如し、宴も酣にして吟聲琵琶歌、都々逸、二上り新内、淨瑠璃、等算を亂して連發す、而も醉ひて亂せず、喰ふて吐せず、洒々落々、何處までも淡白とした所が我等の本領、醉ふて亂痴奇騒ぎをなし喰ふて醜態を渡ずるが世の所謂紳士の一般とぞ聞く、而かも吾等固より世の所謂紳士に非ず、要は唯斯かる會合に際して多少の新智識を交換し互ひに遠ざからむとする交情を溫むれば足れり、歡樂極まりて哀情多しとやら申す事もあれば先づこゝらが切り上げ時と夜十時半頃歡聲裡に閉會、門を出づれば天には明き月かゞく星二つ三つ囁たく、互に樂しく秋を分ち電燈の光に談き影を地に印して歸路につく。初夏の夕風一陣面を拂うて去る。爽快云はん方なし。

因に◉山本直枝君は六月一日より花々しく自宅にて開業の由君が前途の祝福を祈る。◉高儀京治君は近々中上京遊學の由。◉宮川尙平君は松任在中島に開業病客門に滿つと云ふ。◉茨木忠俊君は步兵三十五聯隊に。◉坪田義門君は步兵第七聯隊に。◉高澤冠一君は石川縣警察醫を奉職せられ。◉中本和三郎君、相馬甲五郎君は金澤病院を辭して七尾三島病院に在りて熱心治療に從事せられつゝあり(鴨潮生)

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

人事

●高山教授母堂逝去　本校教授高山基重氏母堂直子は、豫て九州大學病院に於て、加療中の處、遂に去る六月八日永眠せられ、同十日福岡市春吉の令弟自邸出棺崇福寺に於て佛式葬儀を營まれたりといふ。尚ほ遺骸は東京染井なる先考の瑩域に埋葬せられたり。

●福岡喜洋氏母堂逝去　去月　日母堂白玉露中の人となりる同氏の悲哀や察すべく茲に哀悼の意を表す。

●山碕教授歸朝　本會副會長及び金澤病院長たる同教授は去月五日發の當驛發列車にて露領亞細亞及滿韓地方視察の途に上られしが七月十一日午後八時四十五分の下り列車にて無事横山男爵及川崎事務官と共に歸朝せられたり、先生の旅行は約一ヶ月餘ありしも經由せられし所浦塩斯德、ハルピンの主要地を始めとし滿鐵の領域は勿論韓國等精細に調査せられたれば其もたらす所甚だ多大なるを思ふ何れ後日を期し先生の旅行談を拜承して會員と樂しみを共にするの日あるを期す。終りに會員を代表して先生の無事歸朝せられしを祝すと云爾。

●上田教授叙勳　上田教授は今回勳六等に叙せられたり。

●蓮村外男氏　（二十四年）本校醫學科卒業後金澤病院醫員及東京市に開業し高等師範學校醫及保險醫等をふしつゝありしが今回金澤市味噌藏町下中町五〇に於て開業專ら內科小兒科の診療に從事せらる。

●佐野里吉氏　（三十年度卒業）本校卒業後十幾年の永き或は東に西に其枝を振い今春金澤市南町元憲兵屯所跡に於て開業せられ眼科耳鼻咽喉科の診療に從はる。

●久保武氏　（三十一年度）元愛知醫專校教授及び朝鮮大韓醫學校解剖教授たりし氏は今回奉天醫學校解剖教授として來月渡滿せらるゝ由願はく健康に育英の業に從はれむ事を祈る。

●ドクトル、日野信次氏歸朝　三十六年本校醫科を卒業し身を軍籍に任れて以來巢進一等軍醫に進み壯志を抱きて獨逸ミュンヘンに留學し外科學及耳鼻咽喉科を專攻し「ドクトル」の學位を得て去五月十六日無事歸朝せられ六月十日金澤醫學會に同十一日は金澤病院に出席各一場の在歐所感を述べられたり其詳細は何れ本誌に書する所あるべし。

●天野長重氏開業　去る四十年卒業後五ヶ年間金城療病院に勤續し外科、耳鼻咽喉科擔任として聲名ありし天野長重氏は今回同院を辭し羽咋町に羽咋診療院を設置し去月二十九日午後二時より之れが開院式を擧げたり、式場並に來賓控所には數多の畫幅を懸け盆栽を按配して美々しく飾り立てられたり、天野院長の挨拶に次いで角尾羽咋町長祝辭をを朗讀し松原博士、藤彌羽咋郡醫師會長、藤井金城療院長、田邊金澤遞信管理局總務部長其他の祝詞演說朗讀ありて式を終へ夫れより柳亭に於て祝宴を開かれたるが席上藝妓の手踊等ありてなか〳〵に盛んありき尚ほ當日の重なる來賓は前記諸氏の外原警察署長本多郡一課長、町會議員、醫師、同町有志等五十餘名なりき。

●白井涉氏開業　去一日より開設せられたる羽咋郡飯山なる飯山治療院主白井涉氏は四十年度本校卒業生にして卒業後直に上京醫科大學整形外科の介補となり田代博士に就て親しく研究し翌年七月順天堂病院に入り佐藤博士の助手となり博士の指導の下に一般臨床的外科を修め傍ら河久隷博士に就て泌尿生殖器科を專攻四十二年九月福島縣岩瀨郡立病院副院長兼外科部長となりしが今回知友の勸めに依り職を辭し歸途醫科大學其他に遊び歸鄉せるふりと。

●淵原隆奄氏　（四十一年）本月能登飯田町に於て開業せらる。

●鷹津冬藏氏　（四十一年度）神戸市中山手關西病院長たる氏は益々自院の發達を期し今春亦もや本校卒業生鈴木正孝氏を聘し分院長として專ら內科眼科等を診療せしめ大に斯界の爲め盡さるゝ事となりぬ、神戸市は實に我校の勢力範圍に屬し病院に開業に多數有爲の人士を有せるは實に喜ばしき至りなりとす。

●塚本政治氏　（四十二年度）內科二部及東京帝國大學入澤內科介補として內科學研究の所今度鳥取縣立病院內科へ榮轉せらる。

●關承吾氏　（四十二年度）內科二部醫員たりし氏は入營中の所其義務を果し七月十二日より再び內科二部に於て研究せらる。

●北川文松氏　卒業後見習醫官として九師團に勤務中今回終末試驗を終ひ全國三等軍醫の首位を以て任官せられたり願はくは今日の榮譽を尊び益々母校の爲め努力奮勵せられむ事を望む。

●馬詰定衛氏　（四十三年）外科二部醫員を拜命せられたり。

●馬場庄江氏　（四十三年）眼科研究中の所同科醫員を奉職せられたり。

●竹村茂三氏　（同年卒業）內科一部研究中の所福井市衛生醫に轉任せられたり。

●松生哲良氏　（同年）外科一部に研究後兵役を終ひ鶴來町診療院主任として赴任せらる。

●板谷外五助氏　（同年）兵役終了後金澤市手塚內科醫院に奉職せらる。

●齋藤友一氏　本校卒業後內科一部にて研究後福井市醫に榮轉されし氏は今回當院にて眼科研究中。

會告

自明治四十四年六月四日
至仝　七月十日

校外特別會員會費調書

金額	期限	氏名
金參圓	自四十三年度至四十七年度五ヶ年分	天野長重君
金參圓	自四十四年度至四十八年度五ヶ年分	竹多乙三郎君
金參圓	自四十一年度至四十四年度三ヶ年分	久保田保治君
金參圓	自四十三年度至四十七年度五ヶ年分	岡忍君
金五圓	自四十二年度至四十八年度七ヶ年分	秦親眞君
金參圓	自四十七年度至四十七年度五ヶ年分	山田孝太郎君

以上

通常會員に告ぐ

從來通常會員たる學生の會費一ケ年壹圓八拾錢なりしも此度豫算會議の協議によりて一ケ年貳圓五拾錢に變更せられたり。但し特別會員は從來の通り壹圓とす。

特別會員に告ぐ

來九月は本會の會計年度變りに付き會費未納の御方は此際至急御納付ありたし尙ほ會費の納め方不明の御方は本會へ御聞合せありたし。

次號原稿〆切

七月三十日

次號雜誌發刊

八月二十日